

# 層富

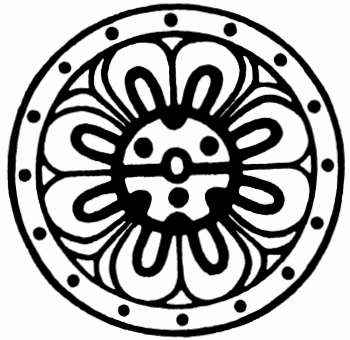
(川口勇書)

## 会誌名「層富」(そは・そふ)の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「層布」「添」とも記され、「倭六県」(やまとのりくのあがた)の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥(20日)の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。(網干善教)



## 会章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

(基本デザイン 朱雀・寛裕)





## 巻頭言

# 文化協会に想う

会長 網 干 善 教

文化協会も発足以来、すでに二十数年が経過しました。遅々遅々ではありますが、それなりに益するところもあったと思います。

「宿昔青雲の志、蹉跎たり白髪之年」という格言があります。その意味は、若い時は大きな志を抱いていたが、だんだん白髪が目立つようになってしまった。』という反省です。

そして「白髪花の落つるを悲しみ、青雲鳥の飛ぶを羨(うらや)む」となります。若い日の思い出です。そして「誰か知らむ明鏡の裏 形影自ら相憐れまんとは」と思いながら鏡に映る自分をじっと見つめてみる。

だが、そんなことは言っておられない。「時を失うは賢に非ざるなり」と。時期を失してはいけない。「自ら適を適とす」。自分の適したものを見出して「いざ征かん。千里の道を」。その場が文化協会の活動の場でもありたい。と願うのです。

## 記念講演(要旨)

### 壁画古墳をめぐる諸問題

関西大学名誉教授 網 干 善 教

高松塚古墳を発掘したのが昭和四十七年(一九七二)三月で、約三〇年前ということになる。高松塚古墳の壁画をめぐる問題はたくさんある。何からどのような話をしようか、これは大変だと、戸惑っている。

高松塚古墳の壁画をめぐることは、いろいろな意見があるが何といつても重要なのは「高松塚古墳にはどのような壁画が描かれていたのか」という確認がすべての出発点となる。これを行なわないで、枝葉末端のことながら論じても、また、「すばらしい壁画だ」とか、「うまく描かれている」などといった感想的な表現をしても、高松塚古墳の壁画の真髄に迫ることはできない。

最初に壁画を見たときから、私には私の考えがある。そのことは今日まで、いろいろな時に書いてきたし、話

してきたので、今日は詳しくは述べないが、要点は次のことである。

一体、高松塚古墳の壁画には何が描かれていたかということについて、

①天井の中央部に、北極五星と四輔四星の紫微垣しびえんの星座を中心に二十八宿の星辰が整然と表現された。この意味はあとで説明する。

②石槨内の東壁のほぼ中央の上部に金箔を貼って表現した日像、西壁のほぼ中央には銀箔を貼って月像を表現している。すなわち東に金で太陽、対する西に銀で月を表現する陰陽思想である。

③東壁の青龍(本来南壁には朱雀が描かれているが、ここでは盗掘のため消滅)、西壁には白虎、北壁には玄

武が描かれていた。すなわち四神図であるが、この図を「四方を守る神」とか「四方の守護神」とか表現する人がいる。しかし、それは言葉の直訳であって、「神」ではない。それよりも、むしろ四神の意味を考えるべきだと思ふ。

④人物像である。東西両壁に各々男・女人物が群像形式で描かれている。この人物について多くの意見が述べられているが、それはそれとして、もし高松塚古墳の内部の壁画を総体として捉えようと、星辰、日月、四神は壁画の主題であり、人物像とは本来的に意味が違うものとして理解する。すなわち、同じ壁画であっても意味するところが違つと考える。

さて、最初に挙げた天井の星宿であるが、そもそも星座を描き、表現することはどのような意味をもつものだろうか。結論的に言つと、東洋哲学の基調の一つである「分野説」を意味していると考ええる。

試みに岩波書店の『広辞苑』の分野の項をみると、「古代中国で、全土を天の二十八宿に配し、各地を司る星座を定めた天上の区分」とある。これが、高松塚古墳や、最近明らかになった、同じ地域にある壁画の描かれ

たキトラ古墳の天文図の意味である。すなわち、天上の星と地上の人間を対応させる思想である。これに基づく思想的表現は現在の私たちの生活にも随所に見られ、用いられている。

四神の場合も同様である。「四方を守る神」といった曖昧なものではない。四神とは青龍、朱雀、白虎、玄武を指す。青、朱、白、玄というのは方色であり、龍、雀、虎、武というのは二十八宿の四方各々の星宿から具象化された動物の図像である。これまた中国を中心として東アジア全域で用いられた四神思想であり、法則である。「青春、朱夏、白秋、玄冬」という言葉も、「青陽、朱明、白臧、玄英」ということも、みなこの思想を背景として生まれ、用いられている。「春、夏、秋、冬」「青、赤、白、黒」も同じである。

さらに、俗といわれる「十干十二支」の天干地支の思想も、これによつていられるものであり、その原理・原則を知らなければ、高松塚古墳の壁画の示す意味を正しく理解することはできない。

ちなみに、東は春で青、すなわち青龍、南は夏、赤で朱雀、西は秋、色は白で虎、北は冬で、いろは玄、すな

わち黒であり、玄冬（亀蛇合体）であるから、その順序も青龍、朱雀、白虎、玄武となる。これは原則である。勝手に順序を変えるわけにはいかない。厳密にいうと、そうした原則は守っていかねければ、歴史というものを正確に理解できないということである。

次に人物群像である。先ほど人物群像図は星宿、日月、四神とは異なつた次元の描写であると考えた。いわばこれは天と地、宇宙現象、自然の法則、ひいては被葬者の身分とかかわるような意味をもっている。それに対して、人物像は全く違つた、人間的な意味をもっている。描かれた男女人物のほとんどは持ち物を持っている。とくに男子は全員持っている。これは明らかに葬送の儀を意味していると考えられる。

もちろん個々にはいろいろな課題がある。持ち物の意味とか、服冠や髪形をはじめ服装の問題とか、衣服の色とか、遠近法や隈取りの技法とか、実に多様な問題を持っている。それは各専門の領域・項目で議論すればよいので、もつと根本的な問題も議論すべきである。これは簡単には結論がでないが、議論はすべきである。二、三例を挙げておく。

高松塚古墳壁画は東西に各々男子四人が群像形式で描かれている。女子像も同じである。ただ、いずれも四人の群像になつている。そこで、なぜ四人なのか、三人とか五人では駄目なのか。中国の古墳壁画を見ても、高句麗古墳の壁画を見ても、男女数多の人物が描かれている。それなのに高松塚古墳では整然と四人が描かれている。四人が描かれているということに特別な意味があるか。

次に、高松塚古墳の東西女子群像の壁画を見る。四人のうち前列に並ぶ二人は綺麗なカラフルな裳を着している。それに対して奥側の二人は単色の裳を着している。この違いは何を意味しているのか。被葬者との関係なのか、それとも身分の違いなのか、とにかく位置と表現に異なるものがあることだけは確かである。そして各々二人に持ち物があり、そのうち、先にいく人物は、色の異なつた団扇を翳している。これには共通性はあるが、ほかの持ち物には違いがある。上衣の色の相違にも問題がある。

また、詳細に観察すると、西壁面北側の緑色の上衣を着した人物の絵に描き違いのあることもわかる。

”朝敵“にされた

## 「すかたん近衛兵」嘆き節

繪内正久

米軍による帝都大空襲。それは終戦の年の昭和20年3月10日の旧陸軍記念日、5月26日深夜の旧海軍記念日以前の両空襲につきる。なかでも3月10日は人類始まって以来、一夜にして8万人を越える死者を出した大戦記録だ。しかも死傷者はすべて武器を持たない老人、女性と子どもらだ。彼らは真珠湾の奇襲攻撃のお返しというが、我が特攻隊がねらったのは米軍艦と将兵だけで市民を的にしていない。それ以来米軍は日本の地方都市の武器なき住民を標的に根こそぎ、じゅうたん爆撃に出た。

さらに8月6、9日には広島と長崎に原子爆弾を投下した。残虐な原爆を世界で初めて浴びせられたのも日本人だ。多くは非戦闘員の年より、婦女子。犠牲者は三千万人余だ。国民の中に戦意を喪失する者もでてきた。

その頃、私たち近衛歩兵第二連隊は宮城北の丸の兵舎を出て、都内本郷のまちなかに疎開していた。皇居が炎上したので敵の標的になりやすい宮城を離れ、上陸して

くる敵を迎撃、一挙に殲滅する作戦だった。皇居全焼後の天皇・皇后両陛下は、宮城内吹上御苑に宮内省にも秘密で近衛一、二連隊兵士が昼夜三交代の突貫工事で構築した「御文庫」と称する防空壕で生活しておられた。防空壕といってもコンクリートの屋根は一ト爆弾にも十分耐えうる厚さだった。地上一階地下二階で両陛下のご居間、天皇の隣室に御璽と三種の神器を安置、食堂、浴室、映写室、内親王の室と地下には会議室。皇族方の集会、陸海軍将星の戦争会議、大臣や政府高官の閣議室である。戦争集結を決断された例の地下壕もここにあった。

このころの敵B29は白昼、単機で帝都高空を悠々と東西南北に横ぎり、伝単を落としていった。都民は広島長崎の例があるので、一機だけの敵機を恐れ警戒した。伝単とは宣伝ビラのことである。そんな紙きれが宮城内にもひらひらと、舞いおりてきた。私たちは近衛師団命令で拾いあげたり、読むことを禁じられていた。しかし、

宮内省の皇官警士たちは、お濠の堤防上を転がっているピラを拾い集めては読みふけていた。尋ねるとよろこんで教えてくれる。どれも「私たちは日本の軍部と戦っているの、みなさんを敵としていません」とか「悪いのは少数の軍上層部です」と、さんさん非武装の我が同胞を殺しておきながら、勝手な文章を、巧みな毛筆体で印刷していた。

そんな8月12日。この日も朝から晴天だった。もう二十日以上雨が降っていない。近衛第一連隊から宮城御守衛の交代要員に、師団司令部から命じられたのは、第二連隊第三大隊。なかでも二重橋の正門儀杖衛兵上番の栄誉に浴したのがわが第九中隊だった。中隊主力が上番して、留守隊に残ったのは人事係准尉と私以下二十人ほどだった。第三大隊の各中隊は本郷区内に散在して大隊本部事務所は、後の総理大臣鳩山一郎邸だった。白亜の洋館二階建てで、一階客間兼書斎の大隊事務室には親子二代の東大教授邸らしく、洋書がずらり。書斎の半円形につきでたバルコニーからゴルフ場さながら広い芝生の庭に出られた。本郷区内には徳川公爵邸はじめ華族、政治家、財界人、学者らのお屋敷が多く、この疎開跡のお屋

敷に第三大隊の各中隊が入りこみ、優雅に居住していた。彼らは若衆宿の気分、軍紀きびしい上下の階級差も薄れ、非番のときは終日ごろごろとすし、消灯時間もあつてないようなものになつてた。

第九中隊の留守をあずかつた私たちも、主力が出払つたあとは、兵舎代用の小学校の教室内にわか兵室で寝そべつたり、冗談をかわし窓辺に腰かけ道行く人をながめ、もはや北の丸兵舎の軍律はけしとんでた。

しかし死を目前に覚悟をきめた若者の清らかな心境、臆せぬ平常心が生みだされていた。口うるさい将校もめつたに兵室に現れず、今は一蓮托生の同じ若き仲間と信じきつているように見えた。間もなく消える命だ。皇城を枕に全員討ち死にという恵まれた死地にいる満足感が、中隊の気分を高揚させ余裕を見せていたようだ。

その朝10時ごろ、東部軍管区のラジオ情報が中隊事務室に流れた。米第58機動艦艇が千葉県九十九里浜海岸に現れ、民家を艦砲射撃、走る国鉄房総線の列車をグラマシ機が飢えた狼の如く爆撃。逃げまどう旅客や農漁民をスポーツ気分で機銃掃射中と伝えていた。笑い声が一瞬兵室から消え、互いに顔を見合わせた。いよいよ現れた

か、最期の時が少し早まったか……そう頷きあっているようだ。地上の阿鼻叫喚にも青空はいつものごとく平和そうに輝いていた。

昼食の直前、准尉に呼ばれた。やや緊張の面持ちに見えた。

「早めに食事をし宮城守備隊司令部へ残留者全員を引率、守衛隊司令官の指揮下に入れ。目下、宮城をめざして戦争をやめ、降服しようという地方の連隊と同調する一部の政治家、反戦運動者たちが天皇を捕えて連合軍に引き渡そうと攻めのぼりつつある。お前たちは陛下を死守するため、たとえお前たちの上官といえども、無理に宮城に入ろうとする者がいたら、直ちに射殺せよ。服装は第一装。各自円匙えんひ（小型軍用シャベル）、十字鋏じゅうじょう（小型ピックル）を携行。軽機関銃の空砲銃身を実弾銃身にかえて行け」

私は初め事態のみこめなかつたが、やがて容易ならざる事態とわかつてきた。大変なことになった。米軍ではなく同士討ちなのだ。とたんに気が滅入った。皆を集め宮城出動と携行具、第一装着用のみをつげ、友軍と撃ち合いの話は伏せた。第一装は近衛兵だけに支給される

守衛専用だ。死に装束にせよとの親心と察した。

食後、准尉に出動申告のため仲間を校舎前に集めると私に告げたのと同じ友軍相打ちをくり返し「司令官の命のままに行動、任務を果たせ」と付け加えた。

一同は一瞬、拍子ぬけの表情をしたが、すぐ御守衛上番の榮譽に輝く精銳の顔にもどった。ふたんは疎開先兵舎から宮城まで都電通りを歩いて行くが、今回は一刻も早く敵襲に備えねばならないので、電車に乗って行くことにした。折から日曜日というのに車内はがらすきで行楽客らしい人影などまったく見えない。兵隊たちはふだんの陽気さもなく、いちように口が重い。友軍と同士討ちの准尉の話で、気もそぞろの様子だ。

春日町の交差点から後樂園 水道橋へ出たが、あたり一面焼け野原でトタン板で囲んだ小屋が、ぼつんぼつんと建っているだけ。人の気もない。神保町の通りを折れたあたりに古本屋街が残っていたが、本を漁る学生の姿は見えない。九段下で電車を降り、右手に軍人会館、左手に牛ヶ淵のお濠を見ながら、靖国神社を目ざして九段坂をのぼった。靖国神社をお参りする人もまばらだ。気がぬけたような熱い日が照りつける幻の都に迷いこんだ

妖しい風景だった。

久しぶりで左手前方に白壁、瓦葺きの重厚な田安門を目にしてほっとした。門の左手に火薬庫と江戸城の不浄門といわれ、城内の刃傷事件の死者や加害者、大奥女中の不義者ら罪人を送り出した清水門を下に見て、二連隊の無人の兵舎に入った。ここで小休止。服装を改めて宮城に入るため、近衛第一連隊の正門へ向かった。九段の靖国神社寄りにある第二連隊の正門は徳川田安家の表門だが、第一連隊は英国バッキンガム宮殿を模した華奢な鉄扉門だった。一連隊の正門衛兵は、私たちの異様な風体を怪しむ様子もなく通してくれた。代官通りをはさんで真向かいの乾門に、歩調の音も高く響かせ宮城の中へ全員入ったとたん、皇宮警士に呼びとめられた。

「もしもし、どちらへ行かれるのでしょうか」衛兵交代の時間は朝九時に決まっていた。昼下がりに近衛兵の一隊が隊伍をくんで入城するなど、本来ありえないことだ。不審に思っ呼びとめるのもむりはない。おまけに服装は守衛用の第一装ながら、円匙や十字鍬をがちやつかせ、機関銃をかついで乗りこんできたから、びつくりしたに違いない。

「守衛隊司令官の命令によって、応援隊として出頭し

ます」私の一言に警士は納得したのか、それ以上深く追及することもなく、「どうぞ」と拳手の礼で通してくれた。そのころの宮城内の道路は、すべて砂利道だった。城内でいちばん広い道幅は乾門と坂下門を結ぶ蓮池通り。明治神宮参道のように細かい砂利が厚く敷かれ、歩調をとって足を高く軍靴で踏みつけると、ざつとざつくと小気味よい音を立て、宮城内をかつ歩する快感と名譽感が若者たちの高揚感を満足させた。左手は蓮池濠と、高さ30センチもある東本丸で天守閣があつたところ。浅野内匠守が吉良義央を刃傷に及んだ松の廊下は今はなく、貴子内親王ら三方がお住まいの呉竹寮はじめ図書寮、屋根が潰れた江戸城御金藏の荒れ果てた倉があるだけ。学習院を通学なさる三内親王はここから乾門に出る橋脚の高い北括橋きたはねはしを渡って行かれた。敵兵が本丸を攻めてきたら、この橋の橋げたをはねあげて本丸を守る仕掛けが橋のもとに幕府以来の姿で残っている。蓮池通りの右側は天皇御常御殿や吹上御苑さらに大内山、皇后さまの山家風の御養蚕室に出る道だ。そこへ入る外庭東門の生け垣、その内側を、陛下の乗馬訓練用の桜田馬場が走っている。



そして蓮池通りの路傍は、みごとな花を咲かせる桜並木と松並木。春四月、松の緑と桜のピンクが美しかった。

そのとき大通りの前方、坂下門方向から一台の車がわれわれの行進方向にむかつてきた。黒色の屋根根にあづき色のボデー。両陛下がお出かけに乘られるドイツ製の大型セダンと同じ型と色だ。天皇のお車は皇后専用より窓の大きさが、やや小さめだ。それによつてわれわれは、どなたの車かを識別して敬礼する。ところが宮城内だけを走り回っている同じタイプの車が八台常備されている。参内者は外から乗ってきた車を、すべて坂下門を入つたそばの百人番所で乗り捨て、両陛下専用車をつくりの宮内省備えつけのこの八台に乗り換えねばならない。外部の病原菌やごみ、ほこりなど異生物やその細胞を宮城内に入りこませないためだそうだ。

その車は午後の日ざしをまともにフロントガラスに受けてまぶしく輝き、車内の人物がまったく見えなかった。皇族方もこの車に乗り換えられるから、その場合は敬礼せねばならない。大臣や政府高官、国賓以外の外国大使、高官には敬礼しなくてよい。また皇族でも軍装の男性と妃殿下では敬礼のしかたが違つてくる。軍隊では星の数

が一つ違つたら神様だ。初年兵や二等兵が兵舎内ばかりか町ですれ違つて一等兵に敬礼しなかつたら、まちがひなくぶんなくられる。また星二つの一等兵より三つの上等兵の方が上位だ。下士官や士官、同じ階級章の将校でも自分の教官か中隊長、よその大隊長殿かで敬礼のしかたが違つてくる。わき見や考えごとで敬礼を怠つたり、まちがえた敬礼をすれば、人ごみの中でも親、兄妹の見ている前であろうと、びんたの二つや三つ思いきりはれる。

ましてや宮城内だ。それが皇族であつたら——まして軍装の皇族であつたら——われわれ近衛兵は日曜外出のとき、上官からくれぐれも街を走っている皇族方のお車に気を配り、絶対欠礼するようなことがあつてはならぬときびくびくいましめられていた。外出するたびに赤塗りの車にびくびくしたものだ。皇族ならナンバープレートの上に紋章があるのだが、反対車線を走る車だと紋章があるものやらないものやら、はつきり見えない。そんなときは、まちがつてもともと、叱られるよりむしろ赤い車を見るたびに、停止敬礼をしたものだ。なにぶんにも宮様への欠礼は中隊長から連隊長まで責任を負うとき

れ、場合によっては近衛師団長、陸軍大臣にまで責めが及ぶとおどかされていたので、近衛兵としては神経質になるのもむりはない。

反射光をまともに受けて車内がまっ暗な車が、いよいよ近づいてきた。皇族じゃなく政府の要人かもしれない。皇族でも内親王か妃殿下か。あるいはだれも乗っていない空車なのかもしれない。部隊を停止させるべきか、否か指揮者にまったく不適な私がどうしようか迷っている間に、車は通り過ぎてしまった。アツと思わず声をのんだ。

最悪——軍装の三笠宮崇仁親王殿下だった。口を一文字にめがね越しに、私を見つめていたように思った。(これはたいへんなことをした……どうしよう) 頭のなかが半ばまっ白になりかかった。ぜんぶまっ白にならなかつたのは、こうしてはおれぬと急に頭の中に指揮官としての責任感が、よみがえったからだ。(とにかく一刻も早く部隊をとめよう) このときすでに欠礼に気づいた仲間もいた。彼らなりに、とんだことになってしまった。この先わが身はどうなるんだ。指揮官がドジだったせいだ。これからのわが身が心配だ……と私をにらんでいるように思えた。

(敬礼だけはしておこう。敬礼すればあとはなんとでもなる) 不審と憎悪をこめた兵隊の顔をちらりと見て、心細げに私は胸の中でつぶやいた。(気をとりなおそう。兵隊たちが見ている) 部隊を止めるや

「着剣ツ」と叫んだ。ひと呼吸おいて

「かしらアー 右ツ」

いつせいに頭を右に回したが、目ざす三笠宮の車は影もかたぢもない。土煙がもうもうと舞って、車が外庭東門に入ったことを示していた。顔を右にしたまま(これでいいんだ。日がまぶしくてなにも見えなかつた) じゃないか。悪いのはおれじゃない。あの目ざしが悪いんだ) そう思いつつ観念した。(じたばたしても、やってしまったことはしょうがない。だがおれにも言い分はあるぞ) いまは逆に落ちついた気分になった。それどころかふてぶてしくなっていた。(悪いのはおれだけじゃない。三笠宮が乗っておられるなら、なぜ運転手は合図をしてくれなかつたんだ) 町中で宮家の車は宮様が乗っている場合、近衛兵が敬礼しやすいよう特別に徐行するなど手を降ったり合図をしてくれる。(あの車はそれをしなかつたじゃないか。気づくのが遅かつたのはそのせいだ)

八つあたりではあつても、敬礼が間に合わなかつた理由にはなる。(それに、遅れたが敬礼だけはしたんだから) という言い訳ができる。さらに(宮様ともあろうお方が、敬礼をしなかつたとか、遅れたとかでいちいち目くじらをとたて、下級将校でもあるまいにそんなエゲツないまねや師団司令部へ通報などなざるはずではないか……)。

そう考えつつ「なおい」の号令をかけ、前へツ進めツ」と部隊を発進させた。7月ごろから戦争の進め方について、軍と政府の合同戦争会議、外交をめぐる閣議、軍上層部だけの会議が、ひんぱんに御文庫内の地下壕で開かれていた。(ひよつとして宮様は、そんな重要会議を相談する皇族会議にご出席されるため、車中であれこれ秘策をねつておられたのではあるまいか。だから近衛の一小部隊の欠礼どころか行進自体、まったくお気づきなかつたのではないのか……) 引率行進しながら、そんな都合のよいことを思いつく余裕さえ生まれていた。

間もなく鉄橋を渡つた。広場から見上げる石造の眼鏡橋越えにある暗緑色の重厚な砂利道橋だ。それを渡れば広場からの視界が消え、守衛隊司令部が近い。(そつだ。

欠礼の件は、司令官にいつきい報告しないことにしよう) 一か八か「すかたん」にとつては、一世一代の大ばくちだ。ばれたり、宮様付きの侍従武官が師団へ通報したら、下士官から兵卒に降等のうえ営倉入りは間違ひあるまい。(すべてを宮様のお人がらにかけよう) —— ずぶとく構えることにきめた。

司令部玄関前に出てきた司令官は第二大隊長だつた。通常なら第九中隊から正門儀仗兵を出しているのに、第三大隊長のはずだ。厳格な古武士の風格を持つ第三大隊長にくらべ、第二大隊長は温厚な紳士風で「ご苦労、ご苦労」と恐縮した様子で、准尉と同じ説明をしたうえ「代官通りの五番丁側入り口の千鳥ヶ淵と半蔵門壕の間の道路沿ひ堤防上に、機関銃の銃座と兵の数だけ掩壕えんごう(たこつぼ)を大至急掘つてほしい。代官通りを交通遮断とし、立ち入り強行の部隊があれば撃退してもらいたい」と結んだ。

兵隊たちは心配した欠礼について、私が報告しなかつたことに一応安堵したもの、まだ憚然とした表情で円匙と十字鉞を不器用に使いながら、堤防を掘りだした。野戦即応の演習をする地方の部隊にくらべ、守衛や儀仗

の訓練しか知らない近衛兵は、労役に向いていなかった。夏の日が落ちかかったころ、やっと任務を終え司令部で夕食、明日に備え早々にベッドに入った。

どうやら宮城攻撃に備える守備隊は、われわれの小部隊だけの様子だった。宮城内は平常通りの衛兵体制で増強兵力らしい兵士の姿は、まったく見当たらない。

わが隊が先陣を承つて宮城入りを命じられた頼もしき防護隊であったのか、と自信を深めた一方で、やはり欠礼の一件が心にひっかかって寝つかれない。(万一あの優しい守備隊司令官に「宮様に欠礼してしまいました」と報告したら、どうなっていたらどうか。狼狽し、困惑し、代わりの兵力を至急手配せねばならぬ。布陣に時間を空費、わが隊が戦線を離脱し謹慎した分だけ、兵力弱体化はさけられまい。ひよつとしてわが中隊の儀仗衛兵まで総入れ替えとなれば、宮城守備に穴があく。いまに師団司令部から、叱責の呼びだしがくるのでは……) 思いは千々に短い夏の夜があけていった。

朝食をすませて一同を引率、代官通りの五番丁口の守備についた。軽機関銃をきのう掘った銃座にすえ、全員で三宅坂方面から英国大使館、九段方面へ一八〇度の視

界をにらんだ。私への不信感は消えた様子もない。欠礼がどこからか漏れ、連隊中が大騒動になっているのか。敵襲より欠礼の方が恐ろしい。(多分、みんなそう思っているのではないのか。指揮官はおれたから、罰はおれ一人ですむだろう……) 悪いことばかり考えていた。

朝9時ごろ、三宅坂方面から赤色の車が五番丁を過ぎしてやってきた。見ていると代官通りへ入ってきた。また赤色の自動車だ。(縁起でもない……) 通りの中央で仁王立ちとなつて大手を広げた私を見て、堤防上に行った連中もおっとり刀で走りよってきた。(あいつにまかせてはろくなことがない) といわんばかりだ。車は小型の外車だった。後ろの座席をのぞくと元総理大臣の近衛文麿公爵であった。長い顔に特徴のあるちよびひげ。細長い体を二つに折るように、足を投げだしていた。

「どちらへお出ですか」 私の問いに元総理は「宮中で会議があるので乾門から宮城へ入ります」体を起こしていいいなことばづかいだった。思ったより青白い顔色の人だ。

「いま代官通りは軍命令で通行禁止になっています。

坂下門なら入れると思いますので、お回り願えますか」

ものおじもせず軽くことばが出た。公爵は

「そうですか」といっただけで、深く問いたたずこともなく、運転手に車を回すよう手をふった。兵隊たちは改めて見直すように、私を見つめた。

午後2時すぎ、代官通りの乾門方向から車が、かなりのスピードで五番丁口目ざし、走りよってきたが、屋根は黒塗り、ボデーはあずき色、きのうの宮内省備えつけの大型セダンと同じだ。(今度はしつかり敬礼して見せるぞ) 通りのまん中まで走りこんで、まず車内の様子をうかがった。黒の礼装を着た白髪の老人だった。兵隊たちも気になると見え、堤防から道路上に、私の命令も待たずばらばらととびだしてきた。(皇族ではないな。やれやれ……) ほっと一安心した。

だが准尉も司令官も宮城へ入ろうとする者がいたら上官でも殺せといったが、代官通りから外へ出て行く者の指示はなかった。見すごしてよいものか、何か尋問してよいものか——思案している間に、ツートンカラーの宮内省の車は、スピードをゆるめず私のわきをすりぬけるように走りさった。その老人は新聞の写真でよく見馴れ

た総理大臣鈴木貫太郎大将だった。

私には目もくれず、前方の一点をにらんでいるようだった。ひざの上に白布でくるんだ長方形の箱らしいものをささげ持っていた。背筋を伸ばし後部座席に浅く腰をおろしていた。

(しまった 総理大臣だったら、車止めて話かけるんだったなア……まずその箱の中身は何んですか尋ねたら、なんて答えるだろう) さきほどまで欠礼の心配ばかりしていたくせに、現元二人の総理大臣との出会い、すっかり気をよくしていた。

その白布に包まれた長方形の中身に興味を持ったのは、理由がある。戦局の雲行きが怪しくなった先月ごろと思う。名前を忘れたが、ある人物から、もし日本が降伏したあかつきには、連合軍が戦利品として三種の神器なるものを引き渡せと迫った場合に備えて、草薙剣や、八咫の鏡、勾玉のにせものをつくろうという話がある、と聞かされた。とつさにその話を思いだした。

(だが首相自らが三種の神器を納めた箱を持って偽作の注文などするだろうか。官房長官が秘書の仕事だろう。それにしても、あのささげ持った姿は尋常ではなかった

な……)と思つたが、すべては後のまつりだ。

代官通りの由来は知らないが、この通りは英国大使館や新宿街道に出る五番丁と中央气象台(元氣象庁)のあつた神田橋とを結び、途中に宮城乾門と近衛師団司令部および近衛第一連隊の正門があるだけ。ビルや商家や工場もなく、あまり人通りや、車が通らないわりには広々とした大通りだった。二重橋前が民家の玄関前庭とすれば、代官通りは勝手口の路地と言おうか。城でいえば堀め手となる。用心手薄なだけに防備上重要な場所だった。神田橋も守備隊に抑えられているせい、五番丁を通つた車は、鈴木首相の一台だけだった。

夕方になると交通遮断を解き、司令部へ引きあげた。明14日は他部隊がひきつづくから、お前たちは女官が住む女官長屋を見張つておれと命令された。女官長屋の衛兵とは、奈良時代光明皇后の紫微中台以来ではないか。近衛兵制に改まつた明治七年からこのかた初めての勤務だ。兵隊たちはまだ、欠礼症候群にとらわれているよつたが、あすは女官長屋ときいて色めきたつていた。

今夜も早めに毛布のなかに潜つた。真夏の夜の皇居は、カエルの鳴き声、たまにけたたましい鳥の叫びに思いを

破られた。(二日もたつたらもう大丈夫だ。思つた通り三笠宮は私たち小部隊に気づかなかつたか、兵隊が敬礼しようが欠礼しようがまつたく意に介さない心の広いお方に違いない……) そう自らを慰め、気を安んじるよつた。それよりも目ざす敵軍はどこへ行つたのか(准尉も司令官も、いまにも反戦の大軍が宮城めがけて攻めこんでくるように言つたが、いっこうにあらわれなではないか。どこか寄り道してるのか、激戦の真つ最中なのか。逐次敵状を伝えてくれたら道路遮断にもはりがでるだろうに……)と、つい愚痴もでる。

(それにしてもおかしいじゃないか。昼間だけ交通止めで、夜は自由だなんて……本来なら夜襲に備えて夜間こそ警戒厳重にすべきではないか。なぜだろう……。ほんとうに敵軍がいるのか) 静かにベッドのなかで考えた。司令部内はひっそりとし、衛兵たちは勤務一途に行動し、敵を迎えるあわただしい動きがない。あたふたと参内する要人、将星は目立つほどでもない。まして皇居内の要所に味方の大軍が息を殺してひそんでいる様子もないのだ。(なにかがおかしい……) そんな思いがしだいにふくらんできた。

俳句

笹

鳴

牧野和代

水無月の髪くりくりくりに切りにけり  
母負ひしこと一度きりげんげ田に  
雨にぬれからくれなるの棗の実  
僧正の忌に笹鳴の来たりけり  
噫くさめしてのちの歩みのおぼつかな  
千日回峰と名付けし枯木道  
日没をぐつと寝まりぬ柚子湯あと  
接木してぎあざあ森の鳴る日なり  
料峭や家毀つ塵村ぢゆうに  
石白を沈め莖立つ中洲かな

素足

握手する夏手袋の小さくて

石畳燈下に映る素足かな

一輪の椿持ちたる尼の指

黒瞳がち睫のながきマスクの瞳

冴えかへる祇園花街下駄の音

上田善次

水温む

寒燈に浮かぶ華師寺塔二つ

日溜りの草抜く背中ぬくもりて

花持ちて行き交う人の彼岸かな

すれ違ふ自転車籠にチューリップ

水温む緋鯉ゆったり寺の苑

大野佐知子

虫すだく

上田千代子

春隣

岡良子

孫悟空の乗ってきさうな秋の雲

どの石も城史を秘めて虫すだく

針箱にのこる白糸夏の果

碑の銘はなでて読みけりかんこ鳥

白梅や紅絹で拭かれし輪島塗

亡き母の面ざし偲び難かざる

衿あしに程よき陽ざし春隣

眼の大きき学生服の案山子かな

ケーキ屋の軒すれすれの聖樹かな

水涸れの濠の泥搔く鯉の鱗



古 希

芽ふくらむ花木残して引越さる

花の宴夢に見る母つむぎ着て

桜餅力を入れず古希を行く

手櫛にもうすき頭髮春深む

日脚伸び余命も伸びる思いして

生駒山

冬晴れの夕日美し生駒山

残雪の割れ目より出で露の臺

白梅は二本寄り添い咲ききそう

起きぬけの目に眩しかり雪柳

朝空に棚引く雲や鳥帰る

周 藤 智 子

赤とんぼ

陽炎や電車いびつに現はるる

十華や剥落多き築地塀

遠き日を探してをりぬ夏まつり

透きとほる空の端より赤とんぼ

赴任地を地図に探して炬燵かな

蝦夷つつじ

高 柳 孝 子

寒椿千本立ちの枝に咲く

蝦夷つつじ紅々と燃ゆ狭庭かな

花浴びて通院するや朱雀門

朝夕の平城宮跡に花の舞ふ

冬日向計の一報にかげりたる

西 田 たまみ

西 山 佐代子

日の盛り

浜 本 るり子

伸びのびと傾ぐ紫苑をくくりけり  
沸点に近づくやかん日の盛り  
乳母車押すサンダルは空の色  
背を向けて手を振るかるさ四月かな  
雪やみて塀の隙間の犬の鼻

花爛漫

福 井 佐知子

花冷えや匂ひひろがる珈琲店  
花どきやいくさ今なき駅につく  
花どきのさそいさそはれ昼の膳  
雨よんで絡みほつるる沈丁花  
歩々たのし池の向かふの花盛り

時 雨

藤 澤 慶 子

落葉焚きポロリとこぼす秘密ごと  
新藁の煙りより少女ペダル踏む  
住み古りし床のさしみや乗ごはん  
写生子の画布の森より秋の風  
指の隙こぼるつぶやき初時雨

躬ぬちの鬼

村 上 俊 子

初旅のごと入院の荷ごしらへ  
豆撒や躬ぬちにひそむ鬼のゐて  
神の手をもつ外科医とぞ噫くさめして  
一力の角をまがりて夜ざくらへ  
ゆふべ魔女よぎりし跡か曼珠沙華

## 書を楽しむ

田室山彦

昨年十月三十一日、心配された雨もなく恒例の神功秋祭が池公園で開かれ、例年以上に参加者が増え、会場は開催時間前から大勢の人が詰めかけていました。

秋祭に先立って、神功四・五丁目在住の書道の先生方にお集まりいただき、日本の伝統文化・書道に親しんでもらう目的で、イベント、「楽書うたがきコーナー」を設けようと相談がまとまり、皆で準備をすすめていました。内容は好きな文字を自由に用意した団扇・カレンダー（実費各百円）に書いてもらい、我々はそのサポートをするというもので、準備段階では初めての企画で、応募人数に不安がありました。実際には短時間のうちに小学生からお年寄りまで九十名の参加者で、好評裏に終わりました。

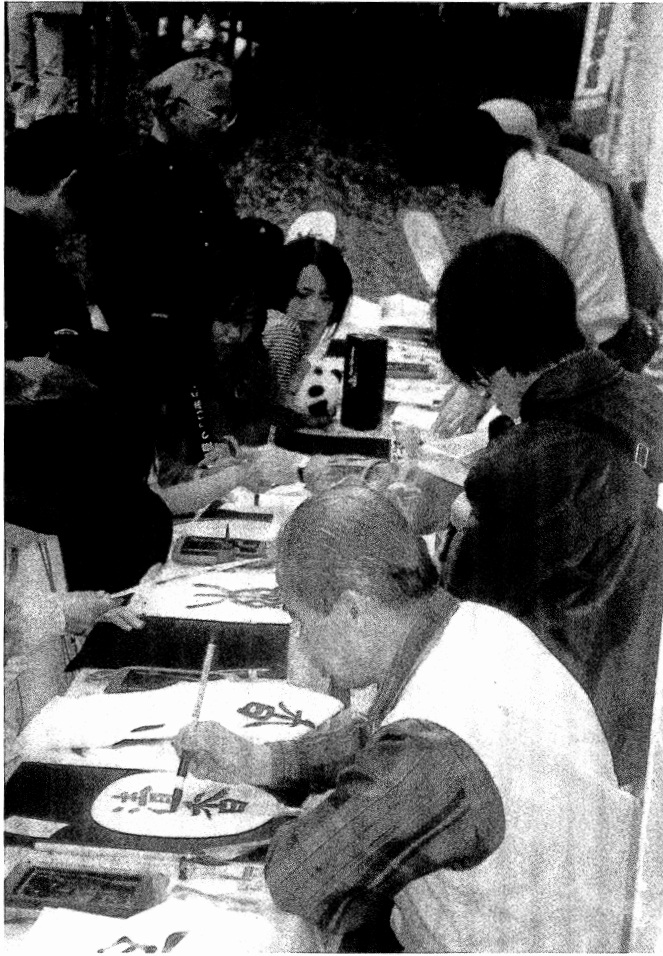
楽書コーナーに平城西中の大西校長先生が同校PTA役員（祭実行委員で当コーナー担当）のKさんに伴われ

て来られた折、Kさんともども学校教育から毛筆書道の授業をなくさないでほしいと訴えました。

秋祭が終って数日後、大西校長先生から電話があり、国語科担当の先生と相談され、国語の授業時間を割いて毛筆書写を外部の先生に教えていただくことに決定、ついでにはご協力を願いたい、というお話でした。

私たちが楽書コーナーを設けた主旨からいっても大変有難い話と担当者一同感激し、とりあえず今年は田室が授業を引き受けることになり、十二月初めより三月まで一年生三クラス計三十時間を教えました。

高校を定年退職後、十年間学校書道教育から遠ざかっていた私には、久々の授業であり、可愛らしい一年生を前に胸踊る日々でした。生徒は私の話熱心に耳を傾け、実際、字を書かせてみると、それぞれの個性がよく生かされた作品で、体調を崩していた私は彼らから元気を貰



いました。国語科担当の先生にはご多忙の中、よく授業をサポートして頂き、また校長先生、教頭先生にも温かいご援助をいただき、生徒たちは毛筆による授業でかなりよく書に親しんでもらったのではないかと自負してい

ます。何よりも書道を授業に採用された先生方に感謝します。今、日本の子どもたちの一部で異常な行動が頻発しています。人間らしい情感を育てる教育が今ほど重要なきはない。書は人柄を表わすといわれますが、情報化社会、企業優先の社会

の中で肝心の豊かな人間性を培う教育がぜひとも必要、たと思いう昨今です。

(付記)

お名前は、先生の署名から転写しました。(編集部)



印度紀行雜詠日誌

十五題

網干善教

一月十六日

亡き人の冥福祈り香を焼く

サールナートの古寺の佛に

一月十八日

悠久のガンガの川は流れ逝く

人の輪廻は如何にあるらむ

朝暗きバラナシの街物乞いの

聲高ぶりてわが生活想ふ

東の空に昇れり赤き陽に

水汲み捧ぐ沐浴の人

一月十九日

ひたすら  
只管にカジユラホに向け夜走る

道の悪さに浅き仮眠と

カジユラホのヒンドウの寺柱見て

豪華さ知りぬ彫刻に驚く

官能を赤裸々に彫るヒンドウの

価値の相違に人の幸とは

一月二十日

傍に牛倒れいて禿鷹の

群たかりけり神の使者かも

遙か見る小高き丘に聳え建つ

サンチーの塔の彫刻に酔ふ

ゲート見る裸の女神ヤクシーの

聖樹持つ手は細く逞し

本生あり佛伝ありて細やかに

千古の彫刻しばし見つめん

一月二十二日

アジャンター千年の歲月のみ鑿振う

工人の力違しきかも

石窟に座しおわします佛たち

現世のインドいかに想うか

未完窟終りて人は悔しさを

抱きて去りぬ石窟の跡

一月二十四日

ジャイナーとヒンドウの寺比ぶれば

インドの神の教え難し

⑧ 歌詠みの歌ではありません。日誌代りのものです。(平成十七年)

桜 蕊

荒居智子

タクラマカン砂中の眠り覚まされしミイラ美し吾よりもなお  
重荷負う友と何もない吾と寺に詣でて賽銭を投ぐ  
風生れて桜花弁立上がり坂道をひたに転びてゆけり  
巢に登り眠れる雀を捕え来る猫を叩けり手に響くまで  
さくら蕊散り敷く寺の土湿り愛の終りの寂けさに立つ

タンホホ

有江貞子

初雪は 古都のすべてを包み込み 木陰で耐える 角なき鹿も  
春日差し ハルヒサシ 飛白姿の カスリ 白川女 香る菜の花 樂しげに売る  
山つつじ 古墳の上を 飾り立て イニシエト 昔人を しばし ナケサ 慰む  
さらさらと ウツ 緑映した谷川も 閑にかゝりて セキ 水琴の如く ゴト  
蒲公英の タンホホ 綿毛 ワタゲ 小さな カカ 種抱え 四方に別れ 一人旅行く



ならのはる

石井光子

初雪にさ庭の柘植は白帽子災害多き猿の年逝く  
参道をゆったり歩む人の波正月三日は穏しくありて  
老春の家の桜は咲き盛る幹たくましく枝を伸ばして  
ひとつこと思ひてすすむ薬師寺に緑萼の梅数輪ひらく  
清盛の字も華麗なり平安の納経の美に心奪はる

### 伊賀上野

大浦小枝子

伊賀上野に芭蕉の名跡めぐり来て十七文字のリズムに浸る  
今はただ汚れしのみ苑池辺に「古池」の句碑しそと建ちある  
みのむし庵の庭に散り敷く椿の花拾ひ集めて手提げに仕舞ふ  
谷底に平石川を覗きつつ三代三基の墓の主思ふ  
発掘にあばかれたりし黄泉の国死者たち黙秘を守りつづくる

春

岡田越子

大寒に春を先どりせんと活けるチューリップとあじさいの芽を  
春きたり草引きすれば眺めよし腰をのばして何回も見る  
親友の近くに越し来たうれしさに姫路城の櫻見に行く  
雨に濡れ傘にひらひら止まるまま桜花びら持ち帰りたり  
窓越しにピンクの玉のごとき花はじけ愛らしまゆみの木見ゆ

ふるさとの

木庭和子

「ふるさとの小野の木立……」と詠みあげし露風顕ちくる赤とんぼ公園  
千年の威厳たたへて圓教寺濃みどりの中葎戸うつくし  
島唄の底に流るる哀愁に心把まれ五更を覚めるる  
オーロラの変幻自在の宇宙ショー緑・紫あざやかな乱舞  
空碧く海山青しみくまのを愛せし熊楠世界遺産成る

## 夏の午後

玉置小代

通り雨過ぎて明るきビルの窓にパノラマのごと夏雲うつる

初実りのトマトを亡母ははに供へるて「美味しいよ」の声聞きたしと思ふ

はなれ住む息子この身に事件起こりしとの見知らぬ男の電話にをののく

巧妙なる振り込め詐欺と氣づく間まを取り乱したる己れが悔し

鳥の声やさしくわれに語りかく事多き日の夕暮るる庭

## 朝の道

馬場恭子

裸木が青空に向ひ悠然と小春日和の陽を吸ひてをり

かさかさと落葉踏みゆく朝の道空気の澄みて頬に冷たき

相性は犬にもあるらし小さき犬とすれ違ひざまに吠えて威嚇す

園児用帽子にリボンを縫ひつけて終日座るも僅かの内職

この帽子いかなる子どもが被るやと一針一針心をこむる

時過ぎて

福光貞子

米寿過ぎ重き検査に耐えし母  
滲む泪を静かに拭いぬ  
叩かれて抓られ添寝の姉妹に  
明けまで待てぬグレープーツ  
必ずやこの杖つきて帰る日を  
願いて過した看護の日日  
子守歌せがみし亡母よいま  
何処誰ぞに何を聴かせ賜うや  
時過ぎて過ぎ行く儘に過すれど  
いつの日吾の悲しみ消ゆる

春の四国路

松村せつ子

早春の四万十川の舟下り  
碧き流れとうぐいすの声  
黒潮の海を見下ろす露天ぶろ  
足摺のお湯ひとり占めして  
ゆれ動く祖谷のかづら橋  
こわごと渡れば眼下の流れは清し  
桜花の中高知の城は凜として  
天守から見る街かすみいる  
琴平宮杖を片手に七百段  
春の陽ざしが皆に優しき

新緑燃ゆ

森田陽子

新築の木の香ただよう春立つ日庭の水仙咲きて耀よう

幾たびか試練の嵐過ぎゆけどいま白桜は空に輝く

紫に樗あうちけぶれる掘割りの雨の倉敷ころ濡れゆく

卯浪立つ九頭竜川を過ぎゆけば見はるかす野は新緑に燃ゆ

生命いのち享けし幼なに贈る家苞いえづとに出世駒買う輪島の阜月

安田和子

文明のなせる巨船おおふねに身をまかせ陽光ようこう彩なす大太平洋をゆく

北つ方天道あまじたどりて射せる陽光ひは海に描けり大き曼陀羅

飛鳥仏・天平仏の故郷と雲崗岩窟い出ずるは淋しき

滅びゆく予感も知らず清盛は金泥の料紙に法華経うつす(平家納経より)

たわたわと撓める桜を悪童は棒をふるいて叩きいるなり

# 漢詩

片桐一夫

礼翁三省

幼童所作自斌斌

幼童ようどうの所作しよさは自おのずから斌ひんぴん斌

年少青春励尽身

年少ねんしょうと青春せいしゆんは尽じん身にはげ励めみ

勇壮戦時対大敵

勇壮ゆうそうの戦時せんじは大敵だいてきにたい対たいす

礼翁卯歳百方仁

礼翁れいおうの卯歳うとしは百方ひゃつほう仁じんなり

不許核年

戦法尽忠成大勲

戦法せんぽうの尽忠じんちゆうは大勲だいくんと成なり

落花時節又逢君

落花らつかの時節じせつ又また君きみに逢あう

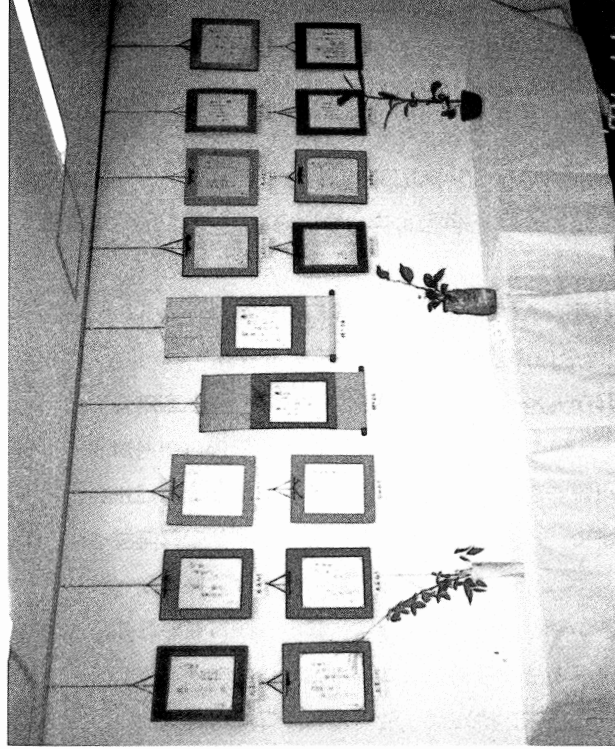
忍人殺戮無残恨

忍人にんじんの殺戮さつりくは無残むざんの恨うらみ

不許核年憂国軍

許ゆるさず核年かくねん憂国ゆうこくの軍いくさは

# グループから四便利!



## 歴史教養講座

三宅 一雄

「神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝靈・孝元・開化……今上」歴代天皇名を棒暗記させられた思い出があります。

小学校六年生か中学一年生の頃だったかと思いますが、何のために覚えなければならないのかと疑問を感じながら、渋々暗誦を繰り返したものです。

中学二年生後半から四年生までは、学徒動員に狩り出され、舞鶴海軍工廠で兵器生産に携わり、全く学問とは無縁の生活を送っております。

昭和二十年八月十五日、突然全員集合がかかり、雑音にまぎれた玉音放送のあと「終戦になった。荷物をまとめて帰宅し、翌週から登校せよ」との指示を受けて学校生活に戻りました。

登校して見ると、校庭は講畑に変身し、校舎も荒れ放

題。教科書の配付を受けたのですが、歴史や公民の教科書は、墨と筆で不都合な部分を塗りつぶす作業から始まり、十五歳の少年にとつては、何が何やら訳のわからぬ学校復帰でありました。

数学や物理は遅れを取り戻すための補習授業で、夕方暗くなるまで学習を続け、何とか微分・積分の初歩まで学んで卒業することができました。

卒業後は技術系の学校に進んだので、歴史や文学とは無縁。周辺では、唯物弁証法や唯物史観が幅をきかせ、皇国史観の教育を受けた者にとつては、目新しく、興味をひかれるものがありました。

職に就いてからは、労働運動や社会混乱の風に揉まれ、右往左往しながら、仕事一筋の道に踏み込み、社会知識や教養からは程遠い生活を送って参りました。

七十歳を越え、閑職に退いたのを機会に「平城ニュータウン文化協会」に入会させていただき、「歴史教養講座」を聴講して、遅まきながら社会人としての「教養」を身につけつつあるという現状です。

毎月第二火曜日の「歴史教養講座」は、優先して私のスケジュール表に明記し、総ての誘いをお断りして聴講

することにしております。

明日香村の「キトラ古墳壁画」四神は、高松塚と共通点が多く、築造時期も近いとのお話も興味深く、また十二支像の子が携えている湾曲した武器が、中国古代の「鈎鑕」であろうという説も、具体的に説明をしていた。面白く、納得して理解することができました。

日本書紀に記されている「百濟大寺」が飛鳥に移って「高市大寺」、「大官大寺」となり、平城遷都とともに奈良に移って「大安寺」となったというお話も興味深いものでした。

「百濟大寺」が何処にあったか、いろいろな説があるようですが「吉備池廃寺」の調査によって日本最初の勅願寺である「百濟大寺」の蓋然性が高いとのこともお話も興味深く聴くことができました。

いつも新しい発掘ニュースをお聞きして、今まで読み流していた新聞記事も、ある程度の予備知識をもって読むことが出来、より深く理解できるようになりました。

時間の許す限り発掘現場へ出向いて、説明を聞きながら、現場の苦労や埋もれた歴史の重みを肌で感じることにしています。



私のような新参者にも理解できるように、懇切丁寧に易しく、ユーモアをまじえ面白くお話をしていた。で、二時間の講義もあつという間にすぎさり、耳学問ながら、歴史の教養を身につけることができます。

単なる「歴史講座」ではなく、「歴史教養講座」としての所以があると思つていきます。

この講座で学んだことを心に思い描きながら、古代の歴史とロマンを尋ねて、飛鳥・葛城・平群・斑鳩・山の辺の道などを春風に吹かれ、秋色を愛で、時には炎熱や吹雪の中を歩きまわつて、心を癒し健康を保つことが出来る幸せを感謝しております。

## 先史学講座

泉 拓良

本文化協会の先史学講座を始めてもう6年になるであろうか。この間、公私にわたり色々な変化があつた。とくに、平成一六年からは仕事先の大学が変わり、担当する専攻も変わった。以前は、学部は文学部文化財学専攻古学担当、大学院は文学研究科文化財史科学専攻国際文

化財史科学担当であつた。新任の大学では、学部は文学部歴史基礎文化学系考古学専修先史学、大学院は文学研究科歴史文科学専攻考古学講座先史学担当である。つまり、以前は海外の考古学が中心であつたが、平成一六年からは先史学が中心になつたということである。これに伴つてというわけではないが、講座のスタイルを少し変えた。本格的に西日本の縄文土器を見直してみようという試みである。

勿論、縄文土器研究は私の専門であるので、何回も講義してきた。しかし、今回は新任大学での授業もあり、縄文土器の始まりから終焉までを、近畿地方の資料を中心に、系統立てて学んでいこうとする試みである。講義に当つてとくに注意している点は、実物、すなわち縄文土器の本物をさわつて、各時代の縄文土器を実感して頂くことにある。

私は学生時代には、時々隠れて土器を舐めた。例えば縄文土器は砂っぽくてさつぱり味、土師器のお皿は、舌に吸い付いてくるような悪女の味等である。勿論手触りだけでどの時代の土器かを当てる土器片「麻雀」もした。土器の研究は理論や方法の研究でもあるが、やはり、経

験や五感が物言う研究分野でもあるのだ。

ただ、時代ごとの土器を見てても飽きてしまう。参加してこそ色々な知識も身に付くということで、実験考古学の手法を取り入れた。縄文土器を飾る様々の文様を、実際に描いてみる。どのような道具を用いて、どのような方法で描くと、よく似た文様が出来たかを実験するのである。

丸鉛筆の軸をジグザグに刻んだ棒を粘土に転がすと、山形押型文という早期縄文土器の文様ができる。丸棒の側面を交互に抉れば楕円形押型文である。勿論縄を撚り、縄文も作った。ただ、作って転がしただけでは、あまり専門的とは言えない。実際の土器の文様を見て、どのような工具かを想像して、製作し、施文して比較する。そうすることで、新たな発見もあるのである。

平成一六年は早期と前期の土器を中心に実習講義をしたが、その中で、私にとっても新しい発見があった。それは、北白川下層式と呼ぶ前期縄文の施文工具である。古くからこの土器の文様は、細い竹を縦に半分に分けた工具（半截竹管）を用いて描かれたと言われてきた。

講座に参加して下さっている皆さんが、庭に生えた

色々な竹を持ち寄って、実際に工具を作って、文様を描いてみた。どうしても、同じようには出来ないのである。私はその原因を知っていた。竹管の身が太すぎるのである。そこで、竹官の内面を削って身を細くしたものを使うのであるが、こんな面倒くさいことを縄文人が一人一人たであろうか？

そんなことを考えながら、持参頂いた竹を施文工具に適した長さに切っていた時に、はたと気付いたのである。それまで、竹を切る時に、軸に直角に切っていたが、斜めに切ったら、土器面に当たる竹管の切断面は細くなるのではと考えた。実際に斜めに切り、半截竹管工具を作った。今まで以上にそっくりな文様が、より少ない労力で作ることが出来た。恐らく、この方法こそが縄文人の方なのであろう。

やはり、考古学研究とくに土器研究の原点は現物であり、自らの手で実際に触り、また実験的にでも復元的に考え実行することにある。このことを改めて実感できた。おそらく、一緒にこのことを発見した参加者の皆さんも、研究の楽しみを共有できたことと思う。

平成一六年度は、このような成果を上げつつ、縄文前期の終わりまでをすませた。それに加え、時として現在調査している中東レバノン・テイル遺跡の報告や、弥生時代開始年代の論争等のトピックスを取り上げることが出来た。

先史学講座では、この一年、このような成果だけでなく、特筆したい悲しいこと、嬉しいことがあった。

新年早々、講座に参加されていたMさんが亡くなられた。彼はこの講座を取り仕切って下さったお一人だった。また、先の発見の時に積極的に竹を用意して下さった方だった。大学の先輩でもあり、いつも笑顔を絶やさず参加いただき、専門は違うとはいえ適切なアドバイスをいただいたに、残念でならない。ご冥福をお祈り致します。

嬉しいこともあった。後で知ったのであるが、講座には、わたしのゼミ生のご家族が二人もいらっしやうた。学生の二人は、ともに平成一七年三月に無事卒業・終了した。ご家族もほつついた感じが伝わってきた。卒業、終了おめでとうございます。

平成一七年度も、昨年に引き続いて、縄文土器を勉強

している。今年は中期縄文土器を完成させるつもりである。縄文土器の終わりと講義の終わりとどちらが早い心配になつてきている。

## 万葉集講座

粟津 時子

松岡先生の万葉講座に入れて頂いて、とても楽しく受講しています。私をはじめ万葉の歌と出会うまでの事を少し書かせて下さい。

私は大阪で生まれ育ちました。昭和の初期に小学校、中学校に通いました。この時代は、野球、テニス、スキー、スケート等スポーツが盛んで、戦前の古き良き時代を楽しみ、文学もフランス、ドイツ、ロシアなどの小説が色々出版されて、私もそちらに興味を持つて読んでいたので、日本のものは特に古典は、学校で習っただけで関心もなく過ごして来ました。戦後になって、焼け野原だった大阪も賑わいを取り戻し、少し生活が落ちついた頃から、主人と二人で近江、京都、奈良方面へ出かけて、石仏や石造の塔等を見て歩くのが楽しみでしたが、地図

を見ても出ていないことが多く、土地の人に聞いてもわからず困った時もありました。

その頃『万葉の道』（扇野聖史著）が出版されたので、当時大好評の、詳しい地図と解説の本で、ご存じの方も多いと思います。私は最初は地図として便利に使って、本に出ている道を歩きました。

「泊瀬の道」が好きで、「初瀬谷」（桜井↓長谷寺駅）の川のほとりを何度か歩いている時に、万葉歌碑を見て本の記事を読むと歌の意味だけでなく、色々な事が少しずつわかってきました。川のほとりを歩きながら、何とも云えない清々しさに本のページの書き込んだのを覚えていきます。

石走りたぎち流るる泊瀬川たゆることなくまたも  
来て見む（巻六・九九一） 紀朝臣鹿人

これが、万葉歌に出会った最初の歌です。この辺りは万葉集巻頭の、「籠もよ み籠持ち」の雄略天皇の泊瀬朝倉の宮伝承地と云われる脇本―黒崎―出雲と続く静かな山と川、人も車も少く、万葉時代の風景を偲ばせる心安らぐ所でした。西は海石榴市をへて山の辺の道へ、東は吉隠よしかばり、榛原に続く道ですが、今でも「こもりくの」泊

瀬の面影を残す大切な場所です。最近赤やブルー等の建築が目につく様になり本当に残念です。

その後扇野万葉教室に通って、色々教えて頂きました。恋歌、子を思う母の歌、別れの悲しみ、嘆きの霧、ユーモアで相手をやり込める歌等々、思い付くまゝに書きましたが、万葉歌とはこんなに楽しい面白いものだったのかと思いました。

それから十年余り、教室も終わってしまい、もつと習いたいとあれこれ迷っていた時に、女学校の同窓会で、渡邊千津さんにお会いしました。私は明日香村の関西大学の史学文学講座に通っていますので、網干先生の講座の事で話はずみ、久し振りのお付き合いがはじまりました。そして万葉教室に入れて頂くことになりました。

受講されている皆様は、明るいわべテランの方ばかりです。先生も気軽にお言葉をかけて下さって、何でも質問できるとても良い雰囲気です。

先生のお話はわかりやすく、毎回楽しみにしています。今迄他の教室ではなかった事を、色々教えて下さいます。先生のテキストには万葉歌（現代訳）の他に、万葉仮名の原文、そしてそれらの意味、時代背景、解説、

先生のご意見、参考として他の諸先生の評注まで出ています。又、文中に出ている文字から、その字の成り立ちを詳しく説明されるのです。その字の元の形(象形と云うのでしょうか)をすらすらと黒板に書かれるのでびっくりしました。家に帰ってから、テキストをもう一度開いて、「常用字解」等で復習したりして、とても楽しい勉強をしています。

万葉に会つてから、大和の風景が一層美しく楽しめるようになりました。

松岡先生、これからも楽しい講座を、長く受けさせて頂けます様に、どうぞよろしく。

## 笹作りの会

岡田 越子

笹作りの先生が亡くなられて早や三年になる。

亡くなられた時は、ショックで皆何も手につかず、ぼろーとしていた。

先生は余りにも器用で、上手に何でも作られた。

私達が甘えて「入院させて下さい」と云うと、いやな

顔もせず、うんうんと云つて、綺麗に直して返して下さい。もう何も出来ないと思ふとがっかりした。

でもしばらくして皆思ひ直して、先生の教へを思ひ出して、先生がいらつしやらなくても、頑張つて続けませうと言ひ出した。「こんな事していたら、先生が笑つてらっしゃるだろうね」なんて云ひながら、人数も減つて六人でも、「ここどうしたらいいのか知ら」とか、上手に出来たじゃないの」と云つて励ましたりして作つていきます。

本格的なものは出来ませんが、どうにか、引出しを作つたり、箱に綺麗な和紙を張つたりして楽しんで居ます。楽しみは、皆でおやつを持ってきて、おしゃべりしながら食べる時間です。

3号公園のふれあい会館で、第二、第四の月曜日の10時より4時頃までして居ります。

都合で、午前中とか、午後だけとか自由です。

家では中々出来ない事も、皆でするといい知恵も出て意欲が湧いてきます。

御都合のいい方、いらして下さいませ。

お待ちして居ります。

## 料理を楽しむ会

奥谷 敏子

料理教室と言えば、独身の時に母に言われ、いやいや行っていました。結婚をして食事を作るとなると、なかなか安く、おいしい料理が食卓にならべる事が、出来ませんでした。その時に知人の人に、この近くに料理教室があるよと言われ、さっそく入会しました。でも、私は、習い事がかさなる曜日でしたが、その時の料理内容や、グループの人達が良かったので続けました。早いもので五年になります。毎年レシピに細かく材料、分量作り方が書いてあり、その手順に従ってチーフの松村さんを中心に、みんなでわいわいと楽しくやっています。今までに、食べに行つて、料理の仕方がわからない料理も、今では、その季節になると、食卓にならべるようになります。料理をならつてよかつたと思います。

この会は、月一回で、第三木曜日、十時〜十二時まで、平城東公民館で行なっています。費用は毎月違いますが、六〇〇円前後です。まずは見学において下さい。お待ちしております。



“今日のメニューは何かしら？”  
レシピの説明中

## 俳句入門

牧野 和代

### 俳句入門あれこれ

俳句入門の十六年度は、病人続出で四人が次々と入院手術という大病をなされ、また親や家族の看病などで大変な苦難の日々を送られた方が多かつた。ご入院の皆さんそれぞれに病を克服し、四月には四人共ご退院になり、元氣なお声を聞かせていただけました。うれしい限りである。層富の原稿もお出し下さり、五月の例会には出席くださるとお聞きし安堵している。どうぞ今後の躬を充分お大切にお願い申し上げます。

月刊誌「ならやま」も四月号で第百五十号を迎えた。よくもこゝまで続いたものと感慨無量である。「ならやま」には、皆さんの出句の中から選んで掲載し、「ならやま考」と題して、句会にできるよう・俳句の形式・切り字「や」「かな」「けり」について、虚子の花鳥諷詠についてなどを解説、また昭和の俳人「波多野爽波の一句鑑賞」欄を設け、皆さんに書いてもらっている。

昨年末に三人の新入会員をお迎えし、病気で休会されていた方々も復活され、五月からの句会も賑やかになることと楽しみにしている。

### 俳句との出会い

西田 たまみ

原稿の事を考えつつ出句七句を携えてバスを待っている。以前は俳句と全く縁が無かっただけに今が信じがたい。あれは父母が相次ぎ他界し悲しみに打ち拉がれていた時のこと、「悲しんではかりだと心配で成仏できないのでは？」と言った娘の言葉に教えられ、折よく催されていた文化祭に立ち寄り、初めての人でも出来るかと勧められ、何か始めようと思つた矢先だったので入会。恩師春駒先生は京大生で俳句をなさり、日本伝統俳句協会の役員で、ホトトギスの同人等を入会后知り、ついてゆけるか心配にもなりました。痛みを堪えて拙い句をご指導下さいました。ご逝去後は和代先生に引継ぎご指導を賜っております。自分の句が選に入った嬉しさは励みとな

り、言葉の学習も出来、文学とは縁遠く、俳句の事も知らず入会し、今の私がある事は、故春駒先生、和代先生、諸先輩のお導きによるものです。途中仕事で出席出来なくなりましたが、俳句を始めてよかったと感謝の気持ちでいっぱいです。何かを始めようと思われる方は、是非一度句会へお越し下さい。毎月第二木曜日、午後一時より、平城院で開いております。お待ちいたしております。

## 英語講座（初級・中級）

橋本 友子

もう二十年以上も前のことですが、中学校の英語の授業時数が週三時間に減らされて、英語教師が反対運動に立ち上がったことがあります。世間一般にはあまり注目されなかったのですが、子ども達の英語の力は目に見えて落ち、当時の文部省もさすがに数年で元に戻さざるを得ませんでした。元に戻ったとはいえ、旧制高校が週十時間やっていた時代はもとより、私などの世代の五〜六時間にさえ届くはずもなく、週四時間を実質的に確保するのが難しいというのが現実だということです。数学

とともに、学力差の大きい課目で、英語は苦手という子が中学一年生の後半には目につく程多くなるわけです。

文化協会の英語講座は週一時間、しかも、変な法律ができて月曜日の休日が増えています。中学生の時の記憶力はもちろんありません。毎日復習する余裕のある方はまずいけません。ここまで条件が整えば、開き直るしか術はないでしょう。

けれども、良くしたもので、たかが週一、されど週一で、一週間経つても一〜二割は確実に残るものがあるようです。初級クラスで使っている中学一年生の教科書も三年かかって、終りに近くなってきましたが、抵抗なく声が出せ、恥ずかしさを脇に置いて、役になりきる力がついてきました。どんなに努力家でもひとりではできない。まさに、教室の力です。質問の質が、英語の本質に関わるレベルになっていることに嬉しい驚きを感じます。

中級のクラスでは、一回読み切りの「小話」を聞き取り力向上を目ざしてやっていますが、笑い声の絶えない楽しいクラスです。中身のユーモアもさることながら、面白さの解釈を巡っての議論が面白いのです。感じ方の





多様性と、その人のそれまでの体験が反映された人生観とでもいうべきものが実に多様で興味深く感じられます。その多様性の上での笑いの共有は、心地よい一体感となり、「楽しく長続き」の源となるようです。

初級と中級の間で二十分程を合同にして英語の歌を歌っています。秋の文化祭の練習としても位置づけて、早くから今年の歌を選定し、励んでいます。昨年、詩の暗唱が好評だった（とひとり決め）ので、今年もやります。

初級・中級とも十人前後で、もう少し増えても受け入れ可能です。いつでも遠慮なく見学においで下さい。

## 地酒を味わう会

松本 敏夫

“不透明な時代”だと言われて久しいですが、不可解な事件や事故がまだまだに後を絶ちません。“ころ”とか“つながり”とかをどこかに置き忘れたがゆえの出来でしょうか。バブルもデフレも物かは地酒の会は、粘

華微笑、すつきり爽やか透明純米吟醸酒でゆく!

04年11月より入会の朱雀在住・東実さんは以来、出席率100%。80歳は越えられてますが元氣そのもの。日本酒に関する知識も豊富で、酒脱な人柄と折に触れなわき出るエピソードも回りを盛り上げ愉快にしてくれています。(昔とった杵柄?フエンシングの構えはお見事です)。

文化祭以降の会の報告を。10月は右京のフランス料理「パザパ」で21人参加(女性10人)。11月は西大寺の「月日亭」20人(8)。年末の忘年会は般若寺「御逢詞巢」14人(9)。05年正月新年会は県庁裏の「天平倶楽部」にて28人(11)の参加。2月は昼は酒蔵見学(広陵蔵)の後、三条通の「梁山泊別館」16人(5)。3月は右京「パザパ」26人(10)。4月は右京の「はな膳」で26人(10)。5月は14日に新大宮「須濱」にて。

毎月第2土曜6時半より、各地に会場を移し例会を行っています。会費は3500円前後。お酒は純米か純米吟醸の全国各地の銘柄。



—2月「梁山泊」にて—



—3月「パザパ」にて—



—4月「はな膳」にて—

## 読書会

山内 梅乃

「あせらず、きばらず、楽しく読んで、語り合う」をモットーに、今年もいろんなジャンルの本を読みました。指導者のいない読書会ですが、ときには専門の先生をお招きしての読書会となります。また、文学散歩などの折りには、現地での先生の説明などで、より詳しく知ることが出来、盛り上がります。

平成十六年度、読書会の活動

四月二日 「蛇にピアス」 金原 ひとみ著

「蹴りたい背中」 綿矢 りさ著

年若い女性二人の、芥川賞ということで、話題を呼んだこの二作品を今月のテキストに選んだ。

この作品は、私達とは全く異質の世界であり、興味と、好奇心の限界を越えた物で、キモチワルイ”などの声が揚がった。

「蹴りたい背中」の方は、中学生のイジメの問題なども考えさせられ、無気力なようにみえて、

自分の志向に合うことには熱中する「オタク」族の生態も垣間見せ、この年代とはあまり縁のない私は只只へエ……の連続。

好むと好まざるに関わらず、この現代を生きている者にとって、この二作品は、正に若い世代への窓と言う感じで読みました。 木庭 和子

五月二八日 文学散歩 「書写山田教寺」「竜野」

竜野は「赤とんぼ」の作詞家三木露風の故郷で、ゆつたりとした町並みはバスもシャットアウトである。あちこちからは赤とんぼの歌が聞こえ、散策に華を添えます。お蔭で至福のときを満喫することが出来ました。

六月二五日 「敵討」 吉村 昭著

七月二三日 「取り替っ子」 大江 健三郎著

全部読んで来なかった人が大半だったので、引き続き来月も挑戦することにしました。

八月二七日 「取り替っ子」 大江 健三郎著

この本は会員にとつては相当な負担だったらしく、今回も全部読んで来られた人は少なかった。作家の妻の兄である映画監督「伊丹十三」の謎の飛び

めたが、流石評判通りの難解な文体にもう「序章」

からつまづいてしまった。折からの猛暑続きの中、辛抱しながら読み始めたが、遂に完読することはできなかつた。

西島 芳子

九月二五日 「大河の一滴」 五木 寛之著

著者は昭和七年生まれ、北朝鮮の平壤で敗戦を迎え、ソ連軍の占領下、着のみ着のまま戦後九州に引き上げてきたという。このことがこのエッセイの中に原体験として何時もある「人は大河の一滴」だとし、「それは一滴の水の粒にすぎないが大きな水の流れをかたちづくる一滴であり、やがては海に、そして空に昇って行きそして再び地上へ」帰る。仏教で言う輪廻だと言われる。本の中に親鸞・蓮如・ブツダ・キリストが出てくることから、宗教による考え方の違い、既往の病氣の話など読み易い本だったせいも盛り上がった。

私としては、プラス志向で、今のままでいいんだよ、もっと気楽に、後押しされているようだった。「融通無碍」という言葉も気に入った。覚えて

十月二二日 「バカの壁」 養老 猛司著

開口一番、皆一様に難しい本やね。

著者は、東大医学部の名誉教授で、解剖学が専門だそうです。「五感から入力して運動系から出力する間、脳は何をしているか。入力・出力と難しい方程式を使い説明されるが、我々にはなかなか理解しにくい。

この本がベストセラーとは、我々脳の解剖が必要のようですね、など理解しにくいぶん分かるうとして話はそれなりに盛り上がりました。

十一月二六日 「介護入門」 モブ・ノリ才著

芥川賞と介護という今時の問題だけに、この本を読むことにしました。文体は今日の若者のが使うラップ調の言葉がやたらと使われ全体を形成しているので読みづらい反面、介護をする若者や、家族とは、など考えさせられました。

十二月二四日 「誤読された万葉集」 古橋 信孝著

松岡先生の、細部にわたっての説明に皆納得。一冊の本で色々な考え方が出来るものだと、改めて読

書の面白さを教えて頂きました。

一月二八日 「新春の集い」 各々読んだ本を発表する。

「朝鮮通信使異聞」「怪」「大河の一滴」「坂の上の雲」「夏の庭」「頭のいい人・悪い人の話方」「孤独を行ききる」「季節のない街」

二月二五日 「宗教練習問題」 ひろさちや著

三月二五日 伊賀上野へ文学散歩。レクチャー。

講師 松岡 禮一先生

## 絵画の会

大台 雅生

会の世話人を引き継いで一年が経りましたが、昨年度一年の経過をまとめて報告いたします。

まず、大きな変化は、教室を新設の北部会館文化ホールの多目的室に移したことです。

従前の出張所会議室とちがって有料となりますが、最新の設備をそなえた多目的室(2)は、明るくて広い(六〇平方米)です。工作台が四面と給水設備と流し台がしつらえられ、絵画制作に欠かせない筆洗、給水が出

来、便利となりました。

会場利用の有料化は、会員の負担になりますが、その利便性とのバランスにおいて、納得できるものであれば止むを得ないと考えております。

次に着手したことは、活動内容を大巾に変え、モチーフを新鮮で多彩にしましたことです。

その第一歩として、プロのモデルを招き、ヌード・クロッキー、コスチューム・デッサンを計六回を実施いたしました。

絵画制作において、構図、デッサン力は、基本的なもので、その点、人物のクロッキーは、技術法向上に大きく寄与するものでしょう。

会員の中には、ヌード・クロッキーなど初体験の方もおられました。京都アート・モデル協会より派遣されたモデルさん達は、流石にプロだけあって、描き手のニーズを素早く受止め、創作意欲を高めてくれました。

前回の二十一号において述べましたが、絵画の創作において、モチーフの選定が作品の出来、不出来を左右する決定的な要素で、描き手のモチベーション、そのものといえます。

本年度も、年度初において一年間の活動内容を企画し、その計画にしたがって着実に活動を展開することになっております。

懸案の会員獲得については、打開の策として、PRとデモンストレーションをかね、会員の作品展覧会を開催いたしました。

学研都市センターのご好意により、サン・タウン中央ロビーの二階コーナーを無料で提供して頂き、三月十九日（土曜）、二十日（日曜）、二十一日（祝日）の三日間のゴールデン・デイを利用して「春の絵画展覧会」を開会出来ました。

何分、急に企画し実施に踏み切ったもので、会員の作品が、不足し、出展作品数も、些か少なく淋しい感じもいたしました。が、タウン内の目抜き場所で、お日がいにも恵まれ、買物客の入場者も多く、試みとしては成功であったと思います。

絵画展覧会の入場者の方々に配った、絵画の会入会の勧誘の「ちらし」を添付いたしましたので、掲載いただければ、幸甚です。

以上、活動の概略を報告いたします。



—春の絵画展覧会—

## 楽しく絵を描いてみませんか！

当絵画の会では新しく入会される方を募っております、是非お誘い合わせのうえ多数の方々の参加をお待ちいたしております。

◎ 絵画の会は地元 平城ニュータウン文化協会内の同好会の1つで、現在10名の会員が加入し月2回の活動日に創作活動を行っております。

活動内容は静物写生、野外風景写生、ヌード・クロッキー、コスチューム・デッサン等々多彩なモチーフを取り入れ、創作意欲の喚起に努めております。

◎ 当会は同好会組織ですので、専任の講師はおりませんが 画歴の長いメンバーがはじめての方にも懇切に援助いたしますので、お気軽に無くお越しください。

◎ 入会ご希望の方は文化協会の年会費¥1,500と絵画の会、会費月¥1,000をお納め下さい。 絵画の会の月会費は6ヶ月分、一括前納をお願いしております

◎ 活動日は毎月、第1火曜日と第3火曜日の午前9時から12時までの3時間です。会場の北部会館の休館日と重なる時は、それぞれ次週に繰下がります。

◎ 会場は野外写生会をのぞいて、奈良市北部会館3階文化ホール内、多目的室(2)を使用しております。

◎ 用具は各自ご自身で準備、用意して頂きますが、初めての方はご遠慮なくご相談下さい。

◎ 作品制作は教室内では水彩が主ですが、油彩等の取り組みについては、個別に助言、支援いたします

★ 絵画の会についてのお問い合わせは、お気軽に下記の世話人にお電話を下さい、ご一報をお待ち申し上げます

右京2, 27-302号 大台 雅生 (おおだい)  
電話 72-0456



## 中国語同好会

神戸 真知子

文化協会の中国語同好会で学び、約一年です。

私の中国語との出会いは、主人の仕事の關係で台湾へいったのがきっかけでした。アンデルセンの“銀貨”と言う物語の銀貨のよう…と言うより、アルミニウムの一円玉だったかもしれない。初めは周りが何をしゃべっているのかまるでわからず、その只中に、一人。日本人は沢山おられました。五十歳を過ぎての外国は、とても孤独でした。他国のお金の中に好奇心の強い日本の硬貨がコロコロ。初めて中国語の聞き取れたときは飛び上がる程うれしかった。お店の前で若い人が、商売繁昌の御札を燃やして、「了（フェイ）！」、「了（フェイ）！」。燃え残った御札が風に飛んで行くのを追いかけて叫んでいる。あ…。飛んだ。飛んだと言っている！。やつと、一足踏み入れられたような気がしました。

よその國のバーゲンセールってどんなだろう？。どんな人があるの？。転がり始めると、最初は怖いと思えた人々の親切やさしさ。自分が図々しすぎるんだ…。妙

に納得した事も含めて、恥をさらして転がることの楽しさを知りました。それをさせてくださった方々に本当に頭がさがる思いです。

電車に乗り、バスに乗り、歩いて色んなお店で買い物ができるようになりました。

台湾からは、香港、プーケット、フランスにも行きました。フランスのプチホテルから、自宅へFAXで予約OKの通知が入ったときの感動。香港へはSARS後に行きましたが、マスクをして笑ってピースと、写真に収まっておられるアメリカの方々らしい姿を、路上の写真屋さんで見かけ…。あの恐ろしい時にと、思わず食い入るように眺めてしまった。台湾ではとても神経質にSARSの時を過ごしましたから。

帰ってからは、北京へも行きました。玉府井で本を買い、〇〇元買うとおまけで後二冊買えるという知り…が、どこでどんな風に券をもらえる？。すると親切な方が、券の交換場所まで連れて行ってくださった。

それぞれの国には色んな事情があり、考えると複雑で気持が落ち込みそうですが、訪れた時、北京の方も香港の方もとても親切でした。



「NHKテレビ 中国語会話」などを教材に  
「漢語（中国語）」を楽しく学んでいます。

北部会館会議室、毎週木曜日9時より 中国語同好会（写真：松村） 05年5月26日

台湾へ行く前に中国語を教えていただいたのは、中国の老師でした。帰ってからは、こちらにも行かせてもらっています。

皆が安心して話せ、旅のできる時がきたらいい。アンデルセンの物語の“銀貨”を人としたら…。日本の一円玉も五百円玉も、元もドルもよそのどの國のお金も、どの國でも通用する時代が来たらいい。

そう願いつつ、まずは話せることからと、すべての言葉を学ぶことはできないので、とりあえずは中国語をがんばっていききたいと思っています。中国語教室は、簡単な質問も気軽に出来、先生はしめ皆さんが教えてくださり楽しい場です。どうぞ、気軽に学びに来てください。

……と、私個人の体験談のような事を沢山書いてしまいました。色んな方がおられます。毎週木曜日。九時～十時半。十時半～十二時と二クラスあり、NHKのラジオ講座のテキストを使っています。この一年間は、以前こちらに来てくださった李さんに手紙を書き、返事とおいしいお菓子をいただき、息子様が日本の大学の先生となられて来日され、葉書を頂戴して皆が読ませていただきました。時候の挨拶から始まる文は、日本人顔負け

の達文で……。ああ。私達もがんばらねばと思つたことでした。

「NHKテレビ、中国語会話」などを教材にして  
楽しく学んでいます。  
北部会館会議室。毎週木曜日9時より。

## 『續日本紀』を読む会

八田 和子

私が初めて『續日本紀』とか、『日本書紀』を知つたのは、ある講座のレジュメに、『書紀』何年何月の項の〇〇……とか、『續日本紀』何年何月何日〇〇……と云つた事に出会つた時、「？」と思ひ、その本を読みたくなり、本屋さんに行きました。本棚には欲しい本はありませんでしたので、店の人に取り寄せるよう頼みました。

入門として、『續日本紀全現代語訳』（上・中・下）を買つて読み始め、いろいろとわかつてきました。その後

全現代語訳の『古事記』、『日本書紀』と読み進み、古典と云われる『かげろふの日記』を読むことにしました。そして、それに続いて、『徒然草』を読み、それから『源氏物語』や『伊勢物語』等を読みましたが、それらのものは、文学的読み物である事がわかり、私の期待している歴史書でないことに気が付きました。

何と言つても、戦後の事として、小学校、中学校（女学校）では、歴史の勉強はなく、やつと中学三年生の時、世界史、日本史の時間がありました。それも、ざつと教わつただけでした。

それから歴史のこまかな事を知りたいと思つていました。その折、文化協会ニュースで、『續日本紀』の勉強会があることを知り入会しました。その時は、「巻第九」の半ばすぎで、元正天皇、神龜元年の頃からでした。鬼頭先生は不自由なお躰にもかかわらず、色々丁寧な教えてくださいました。

それから何年か勉強を続けてきて、今は「巻第三十」、稱徳天皇（高野天皇）の神護景雲二年〜宝龜元年と続く所に入つてきました。

原文と読み下し文と一緒に見るようになり、その間に

は、中身にも少々違う所があるのかなあと思い始めました。

稱徳天皇（高野天皇）になり、道鏡が目立ち始めた。

天平神護二年四月十一日の項に、

宇佐八幡に封戸六百戸を奉った。神の願いによるものである。（後に起きる宇佐八幡神託事件の伏線のようなものである）。

とあり、そして、それより先の、天平寶字八年九月二十日には、「道鏡禪師を大臣禪師の位を授ける」と、云つて、道鏡について特別な待遇があり、その理由を述べています。

が……………、

また、神護景雲三年正月三日の項には、

法王の道鏡は、西宮の前殿に居り、大臣以下はそこに於つて、道鏡に拝賀を行つた。道鏡は自ら祝の言葉を告げた。

と記載されています。

皆皆様は、これらの事——道鏡についての格別な記事について、どう思われますか？。

端祥七色の雲が立ち登つたとかで、年号を変えている。

また、神社、諸大寺等を招請して、色々と勤行、位階を授ける等々の事が続いている。

各代、天皇、大臣達の姿や、その時代々々の政府の有り様を知る事が出来ましたし、又百姓や多くの人民が困難をしいられ、また、きびしい徴発にも堪えている様子を思う時、今、『續日本紀』を教えていただいている事に感謝しています。

細かな部分や疑問等は、渡邊さんや有志の方々調べてもらつておりますし、説明やコピーなどを準備して下さっていますので、有り難いことで、いつも感謝をして出席しています。

皆様も、どうぞお出ください。

手踊り同好会

毛利 公子

（写真だけで失礼します）



——地域の方々と一緒に手踊りを楽しむ——  
(手踊り同好会)

## パッチワーク研究会

若原 和子

月日の立つ早さは、年数を重ねてきた私にとって特に感ずるように思われます。

文化協会に入会して数年、パッチワークを楽しくわかりやすく親切に教えていただいております。

布地の色彩や形作りに、それぞれの個性を生かして作品を作り、出来上った時の満足感や、反省のくり返しますが、それなりに自分の作品には愛着があります。

色や形作りに変化していく面白さには、布が魔法のように想われることがあります。

これからも、教えて頂いている時間を大切に、作品作りをしていきたいと思います。

また、お忙しい時間をさいて教えて下さっている先生に、深く感謝しております。

## 表装の会

西島 芳子

文化協会の各講座が、長年にわたつて使用させて頂いていた、奈良市北部出張所会議室が、平成十六年七月十七日を以つて閉鎖されることになり、代わつて各講座は、高の原駅の南に七月二十日開館された、奈良市北部会館三階市民文化ホールの多目的室を、利用しなければならなくなつた。

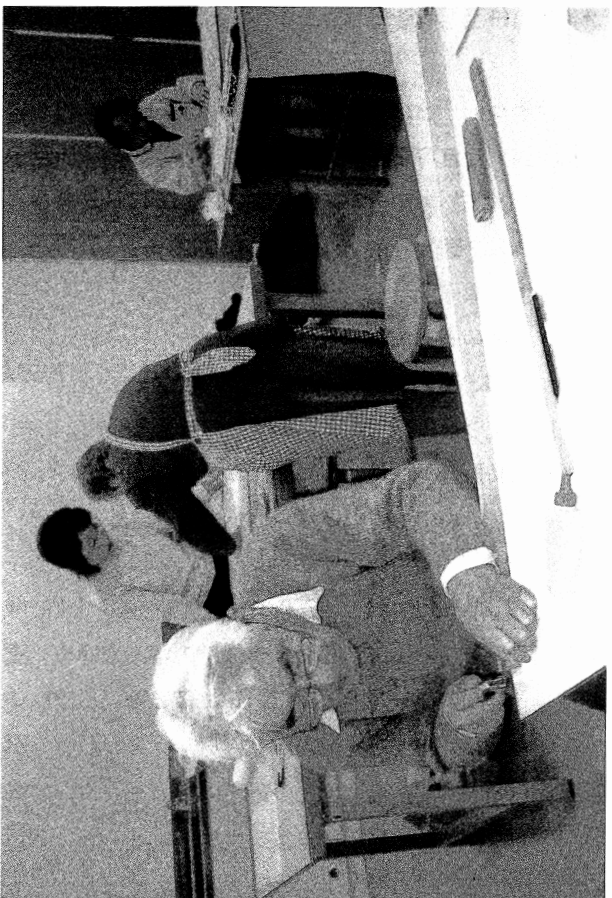
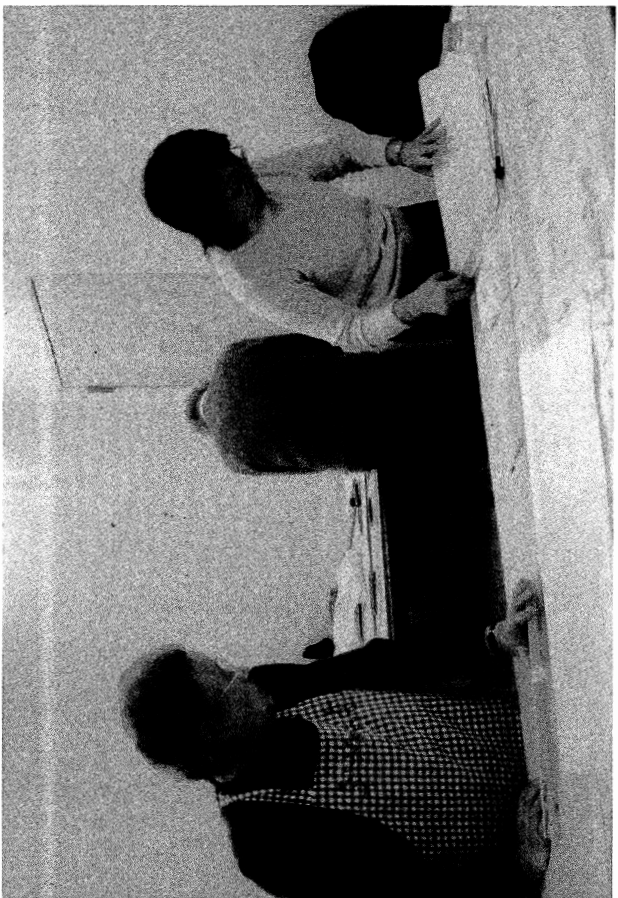
表装の会では、前以つて示されていた図面によつて、洗場と押入れの付いている多目的室<sup>2</sup>を希望していたが、仕事台があるのかどうか、もし置かれるのだつたらその台数、縦、横、の大きさなど、仕事作りに大事なことがさつぱり分からず、そのうちに仕事台どころではない、部屋の使用さへ危ぶまれるという、事態になつてきたのである。

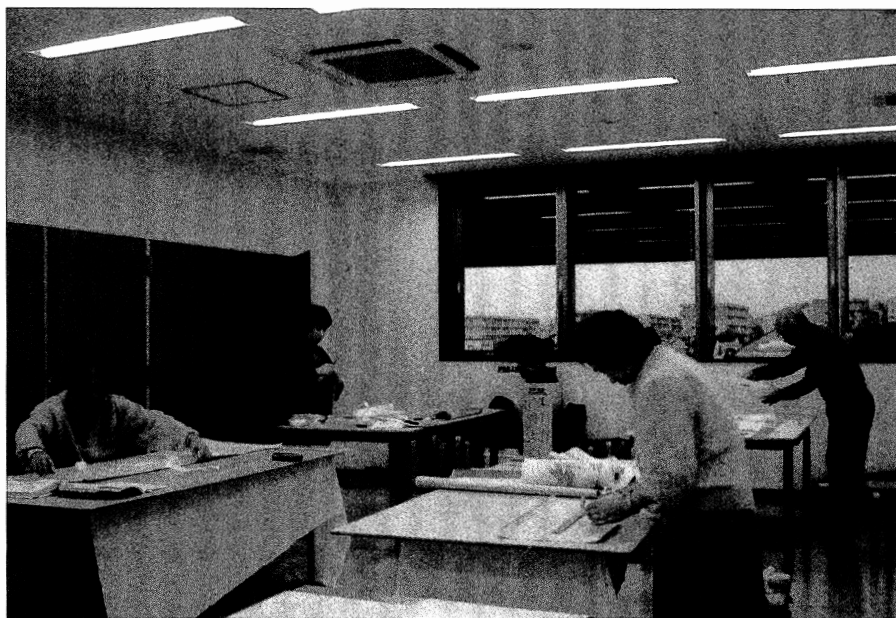
掛軸を作る作業に絶対必要な道具の中に、作業板と張板がある。作業板は、厚さ約一センチ、縦一八〇センチ、横九〇センチ、で作業台（机など）の上に乗せて、軸を作るすべての作業はこの上で行なわれる。張板は裏打ち

（作品の裏に和紙を糊付ける。）されたものを張り付けたり、總裏（裁断された布と裏打ちされた作品を継ぎ合わせたものの裏に、宇佐紙という和紙を全体に糊付けをし、太い刷毛で叩きながら打ち付ける。）されたものを張り付ける。この場合少なくとも二週間は張つたまゝにして置かねばならない。この二種類の板はベニヤ板である。

簡単に講座の度に持ち運びは出来ないから、常時多目的室<sup>2</sup>の押入れに預けっぱなしになることを、承諾して欲しいというこちらの要望は、会館の責任ある立場の方の、作業板など持ち込まなくても、作業机を入れることになつてゐるから、それで間に合うと思つていられたらしく、中々こちらの作業状態など理解して貰うことが出来なかつた。

文化協会の他の講座の中には、思いもよらなかつた高額の使用料金に、会館の部屋を借りるのに見切りをつけ、自治会のふれあい会館、公民館、団地の集会所、などを借りることを見当しておられたが、表装の会では、板の問題がネックになつて、借りられる会場は全く無く、十年近く続いたこの講座も愈々止めなければならぬ時が来たのかと半ば諦めてもいた。





ところが、右京自治連合会長の竹内さんと、文化協会事務局長の山内さんの、再三の会館側との交渉の結果、表装の会の使っている板を、奈良市に寄付することにして、その市の所有になった板を、表装の会が借りるということで、板の持ち込みとその保管、そして部屋の使用が、やうやく許可されることになった。竹内さん、山内さんが、表装の会の立場をよく理解して下さって、熱意と努力を以て、奔走された賜物と感謝している。

教室の移動に就いて、十四・五枚の板をどうして運んだらよいか、これも気がかりだったが、会議室で借りた台車で、会議室と多目的室の間を暑いさなか、何往復もして運んでくれた会員の方々、本当に御苦労様でした。

九月から正式に市民文化ホール多目的室2を、一ヶ月に二回、第二・第四の木曜日の、午前と午後、利用することになった。当時の会員数は九名で、備え付けの四脚の作業机では足りず、補助机を五脚借りねばならない。午前と午後の部屋の使用料四八〇〇円に加え、補助机五脚の借賃五〇〇円を加算すると、会員の一ヶ月あたりの負担は可成り重くなる。

掛軸作りの作業は、限られた時間から時間まできっち



り使いきるということは出来ない。作業の進行状態によって、時間のロスが出る場合も多い。それにそれぞれ家で出来るところをやつてこられるようになって、借りている時間が、有効に使われていないようなので、皆さんの同意を得て十一月から午後だけということに決めた。

九月に吉田小枝子さんが入会され、十二月に大橋芳子さんが、明けて二月に山本康彦さん、西村従子さんが、後進に席を譲られ退会された。御三人とも立派に一人立ちできる方々である。色々会の為に尽して頂き有難うございました。何だか卒業生を送り出したという思いがする。今後とも元気に頑張つて下さい。

会議室から文化ホールの多目的室2へ——さまさまの紆余曲折を経て、現在六名の会員は、第二、第四の木曜日の午後一時から四時半まで、洗場、押入れ付の部屋を適当に、便利に使わせて貰っている。

## 銅板レリーフ同好会

岸下 啓子

昨年の文化祭でのこと、作品を鑑賞しながら、

「わあー、素敵！。こんなのできるのいいね。」

「やつてみたいわあ。」

「でも、金づちやくぎでトンカチするんでしょね。」

「力がないとできないわ。」

「わたしたちには無理やわ。」

と、小声で話す声が……。

いえいえ、とんかちもくぎも使いません。やり方を紹介します。〇・一ミリの厚さの銅板にカーボン紙でやりたい絵や図案を転写し、表や裏から、割りばし、串、へら等で膨らみをつけていく。次にムトウハツプの液に浸して着色し磨く。最後に透明ラッカーを吹き付けてでき上がり。どなたでもできます。出来上がった作品は、インテリアとして飾ってもよし、贈り物にしても結構喜んでもらえます。指先を使うので、若さを保つことができ  
るのでは……？。

会員は十一名。毎月第一、第三金曜日。十三時〜十五

時。西部公民館で活動しています。

一度、教室を覗いてみて下さい。

## ビーズ・アクセサリーの会

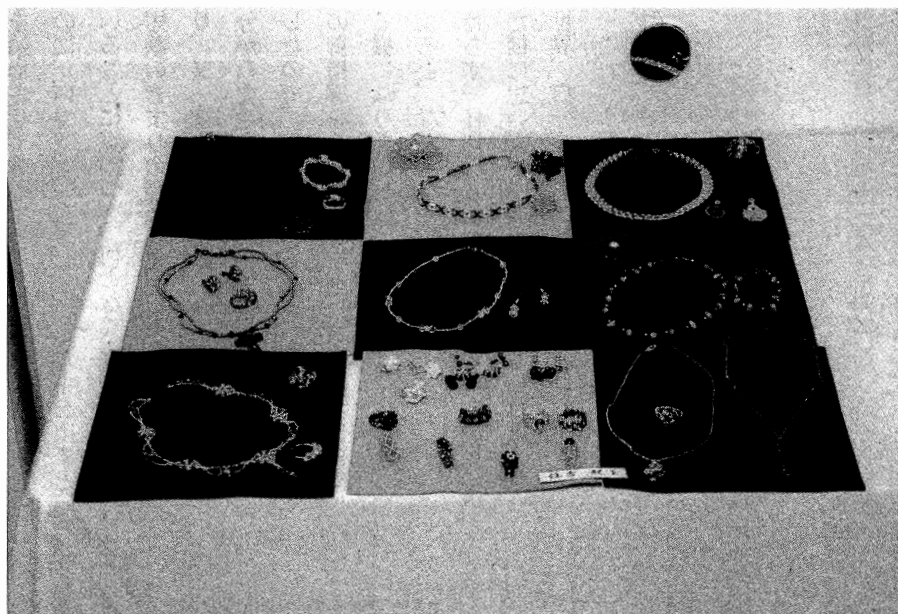
住吉 紀子

平成十五年十一月より、三ヶ月に一回の講座が始まり、平成十六年八月より毎月一回の講座になりました。

今は十五名の会員の皆様が一所懸命がんばって、昨年の文化祭には、全員ステキな作品（ブローチ、メガネチエーンリング、ネックレス）を出品しました。始めは、小さなビーズの穴にテグスを通すのに一苦労でしたが、最近ではスイスイと通せるようになりました。自分で作ったアクセサリーをつける楽しみ。又、娘さん、お嫁さん、お友達へのプレゼントに大変喜ばれております。

毎月作り易く気に入ってもらえる作品を、いろいろと工夫し考えています。今後共、より一層楽しい会になる事を願っております。





## 短歌を楽しむ会

有江 貞子

御歌に今迄縁のなかつた私を誘つて下さつた方に、又そんな私を受け入れて下さつた方々に、感謝申し上げます。頭では俳句だ、短歌だとわかっているつもりでしたが、まるで異文化の様です。日本語のそれらしい言葉が口から出てきません。感動があるのに体のどこかに詰まつて言葉にならない苦しい日々が続きました。ショックでした。だん／＼寡黙かももになつて行く自分がありました。永い間生きていて、何んでも、喜びも、怒りも、悲しみも、時には余計な云い過ぎ喋つていた自分は、一体何を話していたのかとはずかしく思いました。それに反して、目につくものや、耳にするものが今迄より新鮮に捉えられる気がしました。

平常の話し方や、テレビの吉本組などの話し方なども、つい、あれこれと訂正している事に気がつき出し、少し入会より日が過ぎて、皆様の御指導の御蔭で指折る手が楽しく、又らくになつて参りました。詠める事にいゝ材料をさがしていると、時間がとても短く、本当にいゝ事

を始めさせて戴けてうれしく思います。月に一度の事なのに、いつでも難産ですが、ハガキを出すすとはつとして、いることに気がつき、何となく表現のむつかしさに加え、短歌のきまりの様なども知りました。一字入れる事により、又一字抜く事により、歌全体に及ぼす事はまだよく分かりませんが、一年を過ぎ、場の雰囲気は馴れ始めましたので、もつと楽しく御歌が詠める様になる迄、皆様の御指導を受けながら、月の第三火曜日を楽しみに待てる様になりたいと思つています。何故か楽しむ会がはじまると、なんとなく毎回意見と云うより、はにかみの気持ちが一杯になります。とても物、人を見る目が変わった様に思います。人生の偏りかもしれません。知らない世界、自分を知ることとても楽しみです。

これからもごいっしょさせて戴き、すばらしき世界に引き入れて戴きたいと願つています。

## 古文書を読む会

石川 恒久

昨年夏、朝のラジオ体操の会場で、山内さんから古文書を読みたい人が何人か居られるので、文化協会ですークルを作りたいたのだが、というお話があり、リーダーの役目を引き受ける事になりました。

一口に古文書と言っても、時代や種類が多岐にわたります。また、難易度もさまざまですが、とにかく、古文書を読んだ経験のない人にも理解出来るようにとのご希望で、近世文書の基礎から勉強をはじめることになりました。

十月九日から右京ふれあい会館でスタート。予想を上廻る二十数名の方のお申し込みがあり、賑々しい船出となりました。月二回、今のところ四月末まで十三回の勉強会を進めました。

近年は古文書を勉強される方も多く、各地でさまざまな講座や同好会が催されていますが、なかなか基礎の部分について、時間をかけて入念に解説して下さる講座は

少ないように思われます。また、一般の講座についても特定の分野（例えば、地方文書・武家文書・文人の書状など）に偏ったものが多いように思われます。

そうした点を考えあわせ、近世のいろいろな分野の歴史資料を対象として、なるべく早期に読みこなせるようになる事を目標にかかげています。その為の基礎固めとして、先づは変体かなの読み方から始め、次の段階として、版本（木板印刷本）に書かれた読み易い字の挨拶文や証文の雛形などを教材にして、くずし字の基本形と用語や用例などを学びながら、当時の文体や読み方に慣れて行くようにと進めております。

十二月からは版本の資料と並行して、

- ・ 小堀遠州書状
  - ・ 仙台藩主伊達吉村賀状
  - ・ 豊臣秀吉遺言状写
  - ・ 木下長嘯子書状
- などのほか、町方や村方の文書の原本（コピー）にも取り組んでいます。

これらの史料の中で、秀吉の遺書は、幼少の秀頼の行く末を案じる心情が切々と伝わって来ます。反面、天下

の動向を予見出来たであろう秀吉が、家康ら五大老に必死に頼みこむ文面からは、哀れという言葉だけで片付けられないものを考えさせられます。また、村方文書の請状に出てくる少女は、遊女に売られる危険を察して、大坂から一人で信州の善光寺へと逃げ、麻績宿の本陣で保護されますが、当時の交通事情等を思い胸にせまるものを感じます。

一枚の古文書からは、字を読むことを通じ歴史の事実を知り、さまざまな社会の断面をうかがうことが出来ます。また、活字では味わえない、人々の息づかいや温もりを感じます。

読む会のメンバーの方は皆様大変に熱心で、ご自宅で連日辞書を片手に勉強を続けておられる方、ノートに原文をそのままの字体で写し取って勉強しておられる方などもあり、実力もどんどん上昇され心強いかぎりです。

会場では、円卓形式に机をかこんで、みんなで一斉に文書を読みあげたり、不明な点についての活潑な質問や意見が出されます。楽しく和気あいあいの雰囲気が一番大切に、次には、そうしたことが「文書を自力で読み解

ける楽しさと充実感」へとつながって行くことを願っています。

## 押花を楽しむ会

伊藤 京子

以前から、きれいに咲いた草花を、美しいまま残すことが出来たらと思っていました。

平成十一年の春、「奈良・市民たより」で、押し花教室の講座の案内が、掲載されていたので、さっそく申し込みました。

押し花の基本から、ブローチづくり、色紙絵づくり、動物の作り方、カードづくりから花絵額づくりまで、月二回、半年間習い、もつと多くの作品を作りたいと思っていたところ、先生が文化協会で、押し花教室をされているということを知り入会させて頂きました。

草花の採集（つむタイミング）から、花の押し方、乾燥の仕方、押しした花を作品に仕上げるまでの工程の講義を詳しく受けました。

初めて押しした花を、乾燥マットから取り出す時の期待

感、きれいに仕上がった時の喜びはひとしおです。花の名前を覚えたりもしました。絵心がなくても、一輪の花を色紙に置くだけで作品になります。出来上がった作品は一人々個性が出ていて不思議で、押し花の奥の深さを感じます。

わが家では、ミニ色紙を季節ごとに取り替えて楽しんでいきます。大きな額などは、殺風景な部屋が、バツと明るくなりました。

庭に出て、花木、草花の手入れをし、眺めることは、私の心を和ませてくれ日課になっています。

子供達も成長し、御近所とのつながりも希薄になって来た今日、月二回の教室が楽しみで、時にはおしゃべりが弾み、手が進まなかったりしますが、マイペースで作品を作ることが出来、不器用な私でも長く続けることが出来ています。

又、昨年は、廣崎先生を始め皆様の御尽力のお陰で、北部会館に於いて、二度も作品展をする事が出来ました。

長い間、いつも熱心に御指導下さる先生の、細やかな心配りと、奉仕の心に触れ、多くを学び感謝の気持ちで一杯です。有り難うございます。



押し花を楽しむ会 北部会館 文化祭

## ……歩く会

廣田 卓吉

平成十六年は、文字どおり天変地異の起こった年でしたが、私は「……歩く会」で無事に歩けることが出来て幸せを感じております。

四月二十五日（日）晴 平端から安堵町まで

近鉄樫原線、平端駅で下車。北の踏切を渡ってすぐ東の覆屋のなかに、大和の戦国大名、筒井順慶の位牌堂があります。西に歩いて村の中にたえずむ光明寺。松山古墳の横を通って、鎌倉時代の石塔群、額安寺の瓦を焼いたと云われる窯跡を通り、額安寺へ。聖徳太子創建と伝えられる古刹の本堂は再建中でした。虚空蔵菩薩像、文殊菩薩像を別棟で拝観し、安堵町の国指定重要文化財“中邸”へ。戦国時代を生き抜いた大庄屋中家は敷地が一万平方米もあるとのこと。屋敷は二重の堀に囲まれ、その堀の中に中家の持仏堂が有るのには、皆さん、その規模の大きさに驚いておられました。中家のご厚意で中庭と、座敷きの上がり口で昼食をとりました。中邸を出て川沿いに北へ行くと、県指定の文殊菩薩騎獅像が

残る良福寺の文殊堂へ。最後は富本憲吉記念館です。奈良県が生んだ不世出の芸術家。今迄の陶器の概念を破った作品を発表し、第一回重要無形文化財技術保持者で、文化勲章も授与された富本憲吉の数々の名品が展示されています。陶器の趣味や興味を持つ人は、しみじみと鑑賞されておられました。帰路はJR法隆寺駅から。参加者 十五名

五月二十一日（金）曇後晴 平端から安堵町迄の二回目 藤沢さんと長谷川さんの二名参加。勅使の間と呼ばれる客間の床の間の、掛け軸の書を藤沢さんがすらすらと読まれたのは、案内をしていたいた中家の若奥さんがこの軸を読まれる人は少ないと感心しておられました。今日は富本憲吉記念館から国道二十五号線に出て、バスで近鉄筒井駅に、電車で帰路につきました。

六月二十七日（日）曇り時々雨後晴・伏見桃山方面

今回は江戸時代の幕末の舞台となつた伏見桃山周辺を歩きました。京の最初の天皇、桓武天皇の御陵に参拝。古御香宮神社から、造園で大名に取り立てられた小堀遠州の墓がある、黄檗宗仏国寺へ。

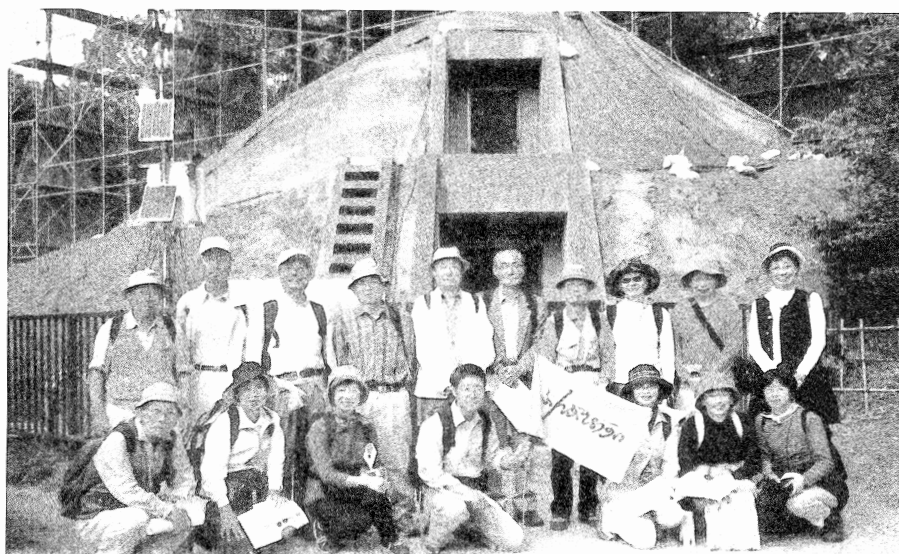
伏見桃山陵へ向かう途中から雨が降り出し、伏見北公





—平端から 中邸前にて—

H16.4.25



—高松塚古墳前にて—

H16.10.25

園スポーツセンターの軒下を借りて食事。

明治天皇のお眠りになる伏見桃山陵は、天皇の御遺言によつて、現在の地に造営されたという。御陵の東に、昭憲皇太后の御陵があり、近くには明治天皇に殉死した乃木大将を祀る乃木神社があります。西に歩いて御香宮神社へ。本殿脇の涌水は、日本百名水の一つと云われ、この名水をいたたく人が並んでいました。駅前商店街を通り、幕末に活躍した坂本龍馬が隠れ家としたという寺田屋を見学しました。近くには、上戸の人にはたまらない伏見の酒造会社が並び、河童黄桜の黄桜酒造を見学、近鉄桃山御陵前駅より帰りました。参加者二十一名。  
七月・八月休み

九月二十六日(日) 晴 平端から安堵町まで。

此のコースの要望があり三回目を実施 参加者七名

十月二十四日(日) 晴

キトラ古墳から高松塚、岩屋山古墳まで。「……歩く

会」と「秋の大和路見学会」と合同で歩きました。平松先生(奈良県立橿原考古学研究所勤務)に案内と解説をして戴く。近鉄壺阪山駅下車。高取町の旧街道を通り東へ。小高い丘に似つかない四角い空調設備の建物の裏が

キトラ古墳です。発見された壁画を剥ぎ取り保存する方

法がとられています。野菜畑を通り北に、東漢氏(やまとのあやし)の氏寺と云われる檜熊寺(ひのくまでら)跡があります。文武天皇陵を通り、壁画の発見により考古学が画期的に変わったと云われる高松塚へ。壁画発見より三十年の歳月は、貴重な壁画にカビが生じ、保存方法が検討されています。近くの中尾山古墳は八角形だと云われています。天武・持統天皇陵から鬼の俎、鬼の雪隠、欽明天皇陵、猿石で有名な吉備姫王墓から飛鳥駅の西の岩屋山古墳で終了。平松先生の丁寧な案内と解説で、大和時代の人々の暮らしを想像しながら、いつもと一味違つ歩く会になりました。参加者十九名

十一月十九日(金) 雨 中止

平成十七年三月二十七日(日) 晴

大安寺周辺「西塔発掘跡」奈良市教育委員会文化財課  
西崎卓哉先生に案内と解説をしていただく。

奈良交通大安寺バス停下車、交差点を西に行くと、街並みの右の丘が、杉山古墳です。古墳時代中期の前方後円墳でこの辺を支配した豪族の墓と考えられています。藤原京の大官大寺が平城京に遷都で、今日の地に移り



——大安寺にて——

「大安寺」となり、奈良時代では南都七大寺の一つとして大伽藍を誇っていましたが、その後、度重なる災禍などで、寺運が衰退しました。戦後、荒れ寺になっていたのを、代々の御住職が再建に努力され今日の大安寺があります。御住職よりお寺の歴史のお話を聞きました。

最近では、各地で遺跡などが発掘されていますが、大安寺も西塔跡の発掘があり、今は埋められた発掘跡で西崎先生に解説して戴きました。大安寺の西の奈良市埋蔵文化財調査センターは、日曜で休館でしたが、西崎先生と職員の方のご厚意で開けて戴き、会議室での昼食後、センターで出土品などの解説をして戴きました。センターで解散。まだ固い蕾の桜並木の佐保川の堤防を歩いて帰途につきました。

参加者二十五名

平成十六年度の「……歩く会」も無事に歩くことが出来たのもご参加下さった皆様のお陰と感謝しております。

詩吟の会

西脇  
孝子



詩吟との出会いは、友人からのお誘いで入会し、早や五年になります。

続いている訳は、実力は別にして、復習程度の声出しと、教材は都度プリントしていただきまして、緊張する時は、発表会と昇段テストです。これも自由です。趣味で学ぶのもよし、健康の為の声出しと、漢詩を味わいながら時代背景を想い、詩人の偉大さに感銘を受けたり、詩の風景に想いを馳せております。一度ライフワークとして、チャレンジしてみてください。一同お待致しております。

流派は多々ありますが、春風流に属しております。  
お稽古日は、第一、第三、水曜日午後です。

場所は平城西公民館です。

講師は吉本先生の後を受けて、西尾弘子先生です。

## フォーク・ダンスの会

木庭 和子

講師の宮川さんとは文化協会短歌会で親しくして頂きましたが、お母様の介護、御自分の御病気等々で、一時お休みになっていました。

久しぶりにお会いして、その変身ぶりに目をみはりました。元々落ち着いた考えの深い方でしたが、病気をみごとに克服、生き甲斐を求めて始められたフォークダンスの虜になり、教師のお免状もとり、公民館や婦人会館で活躍してらしたのです。

楽しい音楽に合わせて、身体を動かすことの甚大なりハビリ効果を目のあたりにして、私は一も二もなくお仲間に入れて頂きました。そして文化協会同好会を作り、月一・二回レッスンを持っています。でも中年を遥かに越えた私、今日覚えたステップも、次の回にはキレイにお返しして、又、又、"アン・ドウ・トロア!!"、グループの人々の優しき、先生の根気の良さに助けられ、"ケイゾクハチカラ"等と嘯きながら続けています。それに日常生活ではめったに着ない可愛いフリルや刺繍のブラウス、フレヤータつぶりのスカート等コスチュームでヘンシンの楽しさも味わえます。

かくて文化協会の"華"となつたフォークダンス。華は多い方が引き立ちます。あなたもお友達をお誘い下さつて、一しよに踊りませんか?。お待ちしております。



——文化祭の発表を終えてホットー息——

フォークダンスの会

写真提供 松村

## 写真同好会

寺嶋 じへお

### 芸術性を高めるために

旅行の写真をもう少し上手に撮りたい方、家庭の写真  
を美しく撮りたい方、草花の開花を記念に撮りたい方、  
社寺仏閣や季節の移り変わりをとりたいた方、普通に撮っ  
ていた写真をもう一歩進めて写真を趣味にしようとする  
方の動機はさまざまですが、その一歩を進めることが興  
味を深めることとなります。

例えば、五月二十四日、明日香村の細川（石舞台の東  
方）へ夕陽と棚田の撮影会を開催しました。

まず、日程を決める時に考えることは、二上山に夕陽  
が落ちるのは「いつか」ということ。夕陽が真西に沈む  
のは、春分の三月二十二日と秋分の九月二十二日、最も  
北に沈むのは夏至の六月二十二日、最も南に沈むのは冬  
至の十二月二十二日。総て二十二日。

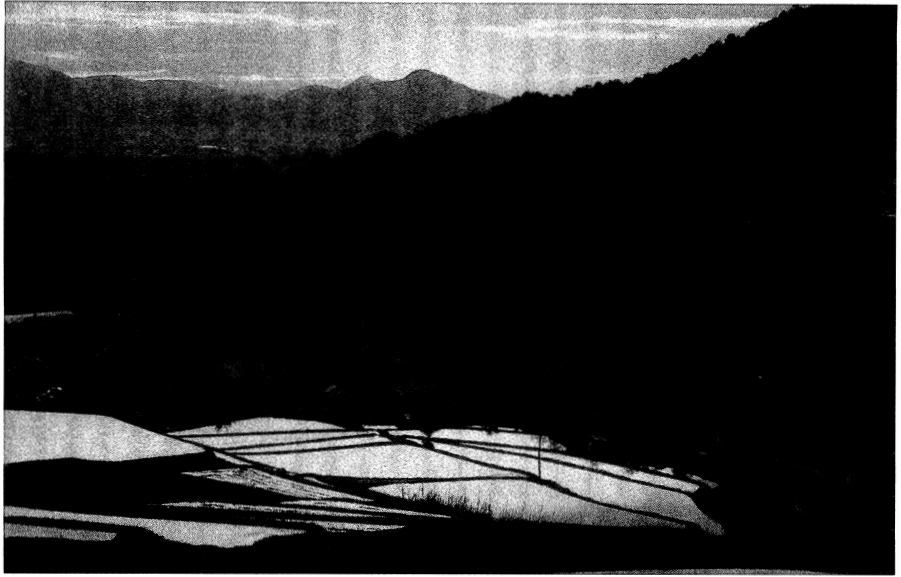
細川は、二上山から見て少し南に下っているので、毎  
年五月二十四日に二上山の雄岳に夕陽が沈みます。これ

を知るためには、気象を考える必要があります。

次に、棚田に水がなければ夕焼けの反射（写真では  
「映り込み」と言います）がないので、田に水が入って  
稲が育つまでに行く必要があります。お百姓さんは、暖  
冬・極寒に関係なく曆通りに、畦を補強し、水を入れ、  
苗を植えます。しかも上の棚田から水を引きますので五  
月二十四日は、下の上居（じょうご）ではなく、上の細  
川でないといけません。これを知るためには、農作  
業を知る必要があります。

次は、日の沈む時間ですが、これは日程と同じ気象で  
すが、毎年同じ、十八時五十九分（これは水・地平線へ  
の日の入が基準）山に沈みますので、少し早くなります。  
ことしの五月二十四日は満月（気象用語では望月）でし  
たが、月の満ち欠けは二十七〜二十九日周期ですので、  
毎年変わります。計算で知ることはできませんが、手取り  
早く知るためには日本気象協会発行の「気象の暦」を見  
ます。

しかも、北西方向が開けた、足場の良い場所という条  
件が満たされる場所は限られますので、細川の資材置場  
にカメラマンが集中することになり、二〜三時間前から



場所を確保しなければならぬのです。

ことは、曇っていて落日はなく美しい残光だけだったのですが、その中に「山越え阿弥陀如来の来迎図」を想像しようとすれば、NHKブックスの「仏像―心と私たち」をひも解いていただきたい。

また、なぜ雄岳の頂上に大津皇子の墓が奈良に背を向けて建っているのかと言うことを知るためには、古事記や日本書紀や犬養孝著の「万葉の旅（社会思想社刊・現代教養文庫）」を読んで、その悲劇的な生涯を思い浮かべながら、写真を撮って欲しいと願うものです。

それがまた、奈良で写真を撮る人間にだけに与えられた醍醐味だと思っております。

趣味としての写真への入り方は単純であっても、それを深め、広めて行くことが人生を豊かにすることだと思います。できれば写真の芸術性を、モノやルノワールの絵画のように高めてゆけたらもっと幸せだと思います。

（全日本写真連盟奈良県本部委員）





# 観月の宴

10月1日(金)



第  
22  
回

文化祭記録



展示の部

◎ 日時 二〇〇五年十一月三日(祝)

十時より十六時半

◎ 会場 北部会館文化ホール

◆ 絵画 梶野 哲 上田 善次 大台 雅生

小西 淑彦 込山 嘉代 高橋ゆかり

西村 通弘 広田 省吾 山崎 明

山田ツル子 伊東 勝己

◆ 銅板 込山 博介 稲田 善彦 皆藤るみ子

レリーフ 杉田 英二 谷口早智子 岸下 啓子

中村 一郎 山崎 明 山田 正

近藤 昭英 藤沢 陽子 森下 幸雄

◆ 木目込彫 谷口 直子 網干佐和子 石森千代子

押絵 奥村 淳子 北アサ子 島田 守恵

杉村 櫻子 杉山 安枝 長柄 清子

東山 幹子 御手洗敦子 森本 登子

鷺塚 順子 西田 昌子 幸路 喜代

◆短歌  
竹腰 清子  
網干 善教  
大浦小枝子  
木庭 和子  
松村せつ子  
打田 照子  
菅 千尋  
堀部 澄枝  
新司 輝江  
杉山 安枝  
久本 美鈴  
山内 梅乃  
吉田 敬子  
廣崎 光子  
奥谷 敏子  
杉山 安枝  
西田 安代  
松村せつ子  
吉田 敬子

徳永美智子  
荒居 智子  
岡田 越子  
玉置 小代  
森田 陽子  
櫛原千鶴子  
吉川 普子  
住吉 紀子  
島川恵美子  
片岡 圭子  
玉置 小代  
宮崎 滋子  
若原 和子  
西田 安代  
伊藤 京子  
木村 絢子  
住吉 紀子  
野原 雅子  
御手洗敦子  
徳永美智子

◆軸装  
西島 芳子  
西村 従子  
岡本 一枝  
赤坐 右一  
大迫くき枝  
北原 吉雄  
寺嶋りくお  
北村 孫衛  
西島 芳子  
石井 栄治  
水野 繁三  
伊藤 昌一  
皆藤 甫  
志智 英子  
西口 義朗  
野原 雅子  
岩坪 昇  
山本 康彦  
伊藤 嶺里  
菊地 俊一  
田中 利忠

◆心子

井本 市子  
安田 和子

若原 和子  
新司 輝江

◆ビーズ

島川恵美子  
馬場 恭子

森岡きみえ  
住吉 紀子

景山 光代  
宇野木久代

鈴木 幸子  
南村 照栄

西本万優美  
山中優美子

景山 光代

◆写真

伊藤 昌一  
伊藤 嶺里

皆藤 甫  
菊地 俊一

志智 英子  
田中 利忠

西口 義朗  
野原 雅子

◆書

田室 西崖  
上田 善次  
上田 千代子

◆俳句

牧野 和代  
岡 良子  
周藤 智子  
多田 文子

南村 照栄  
濱本るり子  
西田たまみ

西山佐代子  
藤澤 慶子  
藤澤 陽子

堀池 敏子  
森田 陽子  
吉田佳寿子

◆押し花

景山 光代

◆地酒の会

写真・日本酒ラベル

上 演 の 部



◎ 日 時 二〇〇五年十一月三日(祝)

◎ 会 場 北部会館文化ホール

◎ 主 催 平城ニュータウン文化協会

上 演 一三時〇〇分

挨拶 文化協会会長 網干 善教

来賓挨拶

1) 箏 曲 一三時〇五分 菊池雅千絵教室

「デイズニーメロデー」／中山 妙子編曲

第1箏 堀内美佐紀・溝口 夏海

中村 友香

第2箏 菊池雅千絵

「大空の橋」／千秋 次郎作曲

第1箏 菊池雅千絵・南湖雅千紗

第2箏 比良 尚美・河村 梨花

17絃 田頭雅千香

2) 詩 吟 一三時三五分 詩吟の会

コングクター 西尾 弘子

吟題 作者 吟詠者

九月十三夜 上杉謙信 独吟) 宗徳 郁雄

出郷作 佐野竹之助 独吟) 岩井 静枝

本能寺 頼山陽

連吟) 杉田 英二・増井 公道

花田 清美・西村 諄輔

寒梅 新島襄 独吟) 山本すま子

富嶽 乃木希典 独吟) 花田 克子

荒城月夜の曲を聞く

水野豊州

連吟) 堀部 澄枝

高松美枝子・西脇 岑子

出郷作 佐野竹之助 独吟) 木村 麻子

静夜思 李白 独吟) 吉田 輝子

大楠公 河野天籟

連・合吟) 西尾 弘子・宗徳 郁雄

杉田 英二・増井 公道

花田 清美・西村 諄輔

吉田 輝子・花田 克子

岩井 静枝・西脇 岑子

山本すま子・香川サワノ

木村 麻子・堀部 澄枝

高松美枝子

4) 英語で歌いましょう 一四時三五分

初級・中級英語講座

詩の朗読

「We Are Together」

曲目

「Singin' in the Rain」

「Let It Be」

「Tennessee Waltz」

橋本 友子

村上 寛子・新司 輝江・島川恵美子

山内 梅乃・岩崎 恭子・松村せつ子

島本 敏子・中西 敦子・木村有美子

高岡 文子・熊田てる子・鈴木 時子

堀田 幸子・中務 明美・田中真理子

高松美恵子・西尾 弘子

3) 舞踊 一四時〇五分 手踊り同好会

小唄 「白扇」 山内 梅乃 (山) 岩井 梅香

「神田祭り」

手踊り 「酒よ」 久門 富美 島川恵美子

歌謡舞踊 「酒よ」 毛利 公子・村上 照

島川恵美子・山内 梅乃

村上 照 (山) 岩井 照香

毛利 公子 (飛鳥 華蓉)

5) マジック 一五時〇〇分 マジック同好会

中村 実・井上 雄司

6) フォークダンス 一五時二〇分 フォークダンスの会

曲 目

- 1) ベ、タピット(イスラエル)
- 2) コロプチカ(ロシア)
- 3) 思い出の東京(レクリエーションダンス)
- 4) ウィンドミルカドリール(アメリカ)
- 5) ワルツカントリーダンス

宮川恵美子

岩崎 恭子・岡田 越子・片岡 圭子  
川畑和加子・木庭 和子・住吉 紀子  
玉置 小代・馬場 恭子・松田 輝子  
松村せつ子・宮崎 滋子・森岡きみえ  
山本 和子・湯川 博子・若原 和子



2005年(平成17)年度  
第23回平城ニュータウン文化協会総会

と き 2005年5月22日①

受付 午後1時より

開会 " 1時30分

ところ 北部会館3F

◇平城ニュータウン文化協会総会次第 午後1:30~2:15

I 開会の辞

II 会長挨拶

III 来賓祝辞

IV 議長選出

V 議 事

(1) 2004年度事業報告

(2) 2004年度会計報告・監査報告

(3) 2005年度事業計画

(4) 2005年度予算

VI 閉会の辞

---

◇第23回総会 記念講演 午後2:30~

『最近の大和考古学の話題』

講師 網干 善教 (関西大学名誉教授)

## 2004年度事業報告

当協会が会場として使っていた、北部出張所会議室が閉鎖となり、変わって北部会館が開館しました。年度途中のことと、会館のことが会員に充分理解されていなかった分、戸惑いもあり、今後の課題となりました。

ニュース・「層富」・協会報は順当に発行されました。協会報は自治会各位のご協力により各戸に配付されましたこと感謝申し上げます。

総会記念講演・文化祭記念講演・セミナーも盛況でした。

文化祭は展示部が11月3日～4日、上演部は3日に行なわれ盛況でしたが、初めての会場で課題も残りました。

- 2004年4月1日 ニュース1号発行  
11日 朱雀地区合同懇親会参加  
25日 左京地区合同懇親会参加  
25日 右京地区歓送迎会参加  
5月8日 「地区センター老春の家」見学会・委員会参加  
23日 第22回(2004年度)総会  
記念講演『最近発掘の飛鳥の成果』  
講師 網干 善教先生  
23日 懇親会(出席者有料負担)  
吉日 各自治会連合会長様へ、各ふれあい会館及び集会所使用についてのお祝い文書発送  
6月1日 ニュース2号発行  
13日 セミナー「近世の城下町と藩領について」講師 野崎 清孝先生  
7月20日 奈良市「北部会館」開館式 出席  
31日 常任理事会  
8月1日 ニュース3号発行  
19日 文化祭上演の部 打ち合わせ会  
26日 文化祭展示の部 打ち合わせ会  
9月1日 「層富」21号発行  
10月1日 協会報発行 全戸配布  
1日 観月の会  
1日 ニュース4号発行  
2日 「層富」編集委員会  
24日 大和路見学会 飛鳥(橿原市～明日香村)講師 平松 良雄先生  
26日 文化祭上演の部 北部会館スタッフと最終打ち合わせ会  
11月3日 文化祭開催  
記念講演「大安寺西塔の発掘」講師 西崎 卓哉先生  
3日 文化祭上演会  
詩吟、日本舞踊、箏曲、英語講座、フォークダンスの会  
3日～4日 文化祭展示会  
絵画、銅板レリーフ、木目込み人形押し絵、短歌、園芸、写真  
パッチワーク、俳句、押し花、表装、書、ビーズ、地酒の会  
6日 ごくろうさん会  
12月1日 ニュース6号発行  
2005年1月16日 平城ニュータウン「新春を祝う会」参加  
2月1日 ニュース6号発行  
4日 「層富」編集委員会  
20日 ビーズアクセサリー講習会 住吉 紀子様  
3月26日 理事・常任理事会  
3月27日 大和路見学会 大安寺方面 講師 西崎 卓哉先生



## 2004年(平成16年)度決算報告

平成16年4月1日～平成17年3月31日

【収入の部】

(単位、円)

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
前年度繰越金	60,329	60,329	0	
会 費	450,000	567,000	117,000	@1,500×378人
後 援 費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
寄 付 金	10,000	20,000	10,000	講師お礼戻り
雑 収 入	671	2,645	1,974	銀行利息 他
合 計	591,000	719,974	128,974	

【支出の部】

項 目	予 算	実 績	増 減	備 考
事 業 費	70,000	144,450	74,450	文化祭、セミナー等
助 成 金	0	0	0	16年度なし
会 議 費	10,000	4,195	△5,805	会議、資料、他
広 報 費	370,000	292,000	△78,000	会誌、会報、ニュース
事 務 費	10,000	11,632	1,632	事務用品、他
印刷消費	80,000	108,750	28,750	コピー機消耗品
通 信 費	3,000	2,505	△495	郵送料
渉 外 費	10,000	2,000	△8,000	協賛費他
雑 費	20,000	14,867	△5,133	項目にない出費
予 備 費	18,000	0	△18,000	
積 立 金	0	0	0	
小 計	591,000	580,399	△10,601	
次期繰越金		139,575	139,575	
合 計	591,000	719,974	128,974	

特別会計 南都銀行スーパー定期 ￥395,699

備 品 コピー機一台 LEODRY2540 (第2団地2階中会議室に設置)

会計監査報告

平成16年度の、会計帳簿証票類他関係書類等を精査した結果適正であることを認めます。

平成17年 4月 5日

監 事 東 勲 (印)

” 西 村 美佐子 (印)

## 2005年度事業計画

### はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも提携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

### おもな計画

- 1 講演会の開催  
総会記念講演  
文化祭記念講演
- 2 セミナーの開催
- 3 会誌『層富』の発行
- 4 会報の発行（全戸配布）  
文化協会案内号  
文化祭 案内号
- 5 ニュースの発行（隔月発行予定）
- 6 大和路見学会  
春1回  
秋1回
- 7 文化祭の開催
- 8 観月の夕べの開催
- 9 年間を通じて趣味の講座開催
- 10 その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

## 2005年（平成17年）度予算

### 【収入の部】

（単位、円）

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	139,575	
会 費	495,000	@1500×330人
後 援 費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄 付 金	10,000	
雑 収 入	425	銀行利息他
合 計	715,000	

### 【支出の部】

項 目	金 額	備 考
事 業 費	150,000	文化祭、セミナー他
助 成 金	84,000	@3,000×28講座
会 議 費	20,000	会議、資料、他
広 報 費	300,000	会誌、会報、ニュース他
事 務 費	10,000	事務用品
印刷、消耗品費	100,000	印刷機器消耗品、コピー
通 信 費	3,000	郵送料
渉 外 費	10,000	協賛費等
雑 費	20,000	各項目に該当しない必要経費
予 備 費	18,000	
積 立 金	0	
合 計	715,000	

# 講 座 ・ 同 好 会 一 覧

	定期講座・同好会	担 当 者	☎71局	曜 日 ・ 時 間	予定会場
1	歴史教養講座	網 干 善 教	6510	第2火曜日(10時～12時)	北 部 会 館
2	万葉講座	松 岡 禮 一	2964	第1水曜日(13時半～15時半)	北 部 会 館
3	先史学講座	泉 拓 良 問合せ 山内梅乃	1654	第3月曜日(15時～16時半)	右京ふれあい会館
4	書道講座	田 室 西 崖	7035	第3月曜日(13時～15時)	右京ふれあい会館
5	読 書 会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
6	英語講座 初級 英語講座 中級	橋 本 友 子	0395	毎月曜日(9時半～10時半) 毎月曜日(10時半～11時半)	右京ふれあい会館
7	中国語同好会初級 中国語同好会中級	松 村 如 洋 ** トヨ	9605	毎木曜日(9時半～10時半) 毎木曜日(10時～11時半)	北部会館会議室1
8	俳句入門 (平城山句会)	牧 野 和 代 問合せ 西田たまみ	1777 1922	第2木曜日(13時～16時)	平 城 院
9	短歌を楽しむ会	網 干 善 教 問合せ 木庭和子	6510 3494	第3火曜日(13時半～16時)	北 部 会 館
10	絵 画 の 会	問合せ 大台雅生	72-0456	第1・3火曜日(10時～12時)	北 部 会 館
11	写 真 同 好 会	寺 嶋 り く お	090-4640- 7316	概ね月2回土曜日、ニュースで通報	北 部 会 館
12	山 歩 き の 会	西 幹 友 雄	6102	第2土曜日(雨天の場合は第3土曜日)	野 外
13	… … 歩 く 会	広 田 省 吾	0207	奇数月第3金曜日偶数月第4日曜日	野 外
14	園 芸 の 会	北 村 孫 衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4-7-5
15	詩 吟 の 会	吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美	5036 2787	第1-3水曜日(13時～16時)	平城西公民館
16	手踊り同好会	毛 利 公 子	1989	第1・2金曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
17	押し花を楽しむ会	問合せ 若原和子	72-2508	第1木曜日(13時～16時半) 第4水曜日(10時～16時)	北 部 会 館 右京ふれあい会館
18	表 装 の 会	西 島 芳 子	72-0335	第2・4木曜日(13時～16時半)	北 部 会 館
19	料理を楽しむ会	松 村 せ つ 子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平城東公民館料理室
20	銅版レリーフ同好会	問合せ 皆藤るみ子	2960	第1・3金曜日(13時半～16時)	平城西公民館
21	パッチワーク研究会	打 田 照 子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	右京ふれあい会館
22	宮 作 り の 会	問合せ 山内梅乃	1654	第2・4月曜日(10時～16時)	右京ふれあい会館
23	地酒を味わう会	松 本 敏 夫 問合せ 鈴木昭弘	1690	第2土曜日(18時半～)	会 場 不 定
24	フォークダンスの会	宮 川 恵 美 子 問合せ 玉置小代	0066	第1火曜日(13時半～16時) 第3木曜日(13時半～16時)	北 部 会 館
25	「続日本紀」を読む会	渡 辺 馨	72-4855	第4火曜日(13時半～15時半)	平城第2団地
26	古文書を読む会	石 川 恒 久 問合せ 山内梅乃	1654	第2・4土曜日(10時～12時)	右京ふれあい会館
27	ピースアクセサリーの会	住 吉 紀 子	1699	第1月曜日(13時～17時)	右京ふれあい会館
28	マジック同好会	出 口 幸 男 問合せ 井上雄司	5236	第2土曜日(13時半～15時半) 第4金曜日(9時半～12時)	平城東公民館

# 会 則

## 第一章 総 則

第一条 この協会は、平城ニュータウン文化協会と  
いう。

第二条 事務局は、平城西公民館に置く。

## 第二章 目的及び事業

第三条 会員の研究・創作発表、知識の交換並びに  
会員相互間及び他の文化団体との連携提  
携の場となり、相互文化に関する進歩普  
及をはかり、地域文化の発展に寄与する  
ことを目的とする。

第四条 前項の目的を達成するために、次の事業を  
行う。

- 1 講演会・研修会・展覧会・発表会・文  
化講座等の開催。
- 2 関連文化団体との連携及び協力。
- 3 研究の奨励及び研究業績の表彰。

## 第三章 会 員

4 会誌の発行。  
5 その他目的を達成するために必要な事  
業。

第五条 平城ニュータウンに在住又は勤務する者  
で、協会の目的に賛同する者とする。会  
員の種別は次のとおりとする。

1 正会員 年間会費一、五〇〇円

但し、高校生五〇〇円

2 賛助会員 この協会の趣旨に賛同する  
者で、年間会費五、〇〇〇円以上納め  
る個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費  
は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但  
し、二年間会費納入なき場合は退会と  
見做す。

## 第四章 役 員

第六条 協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、  
事務局長一名、事務局次長一名、会計一

名、理事若干名、監事二名。

第七條 理事は、正会員中より選出する。

二 会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め総会の承認を得る。

三 事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四 監事は会員中より二名選出する。

第八條 会長は協会を代表する。

二 副会長は会長を補佐し、会長事故ある時は代行する。

三 理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四 常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五 事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当たる。

六 事務局次長は事務局長を補佐する。

七 会計は会計事務を処理する。

八 監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九條 顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二 顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十條 役員任期は二年とし、再任は妨げない。

二 補欠より選出された役員任期は、前任者の残任期間とする。

三 役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

## 第五章 会 議

第十一條 理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあつたときは、理事会を招集しなければならない。

二 理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三 理事会は理事の二分の一以上出席しな

ければ議事を開き議決することができる。  
ない。

四 理事会の議事は、出席理事の過半数を  
もつて決し、可否同数のときは議長が  
決す。

第十二条 常任理事会は、会長、副会長、常任理事、

事務局長、会計によつて構成し、必要に  
応じ会長が招集する。以下理事会に準ず  
る。

第十三条 通常総会は毎年一回会長が招集する。

二 臨時総会は、理事会が必要と認めたと  
き会長が招集する。

三 総会の議長は総会出席者の中から指名  
する。

四 総会の議事は、出席者の過半数をもつ  
て決し可否同数のときは議長が決す  
る。

第十四条 次の事項は通常総会に提出して、その承認

を受けなければならない。

1 事業報告及び収支決算

2 会計監査報告

3 事業計画及び収支予算

4 その他理事会において必要と認めたる  
事項。

第六章 会 計

第十五条 経費は会費並びに補助金、その他の収入に  
よる。

第十六条 会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三  
月三十一日に終わる。

第七章 会則の変更

第十七条 この会則は、総会の議決を得なければ変更  
することができない。

第八章 補 則

第十八条 この会則施行についての細則は、理事会の  
議決を得て別に定める。

第十九条 この会則は昭和五十八年二月二十七日から  
適用する。

# 2005年度 役員名簿

会長 網干善教  
 副会長 上田善次  
 事務局長 山内梅乃  
 事務次長 玉置小代  
 会計 大浦小枝子  
 監事 西村美佐子  
 参与 東 勲  
 参与 川口 勇  
 参与 赤坐右一  
 参与 石川恒久  
 参与 井上雄司  
 参与 打田照子  
 参与 大迫くき枝  
 参与 岡田越子  
 参与 皆藤るみ子  
 参与 梶野 哲  
 参与 片岡 圭子

北村孫衛  
 木庭和子  
 鈴木幸子  
 住吉紀子  
 田中幸夫  
 田室西崖  
 寺嶋勳雄  
 南村照榮  
 西島芳子  
 橋本友子  
 花田清美  
 馬場恭子  
 廣田省吾  
 松岡禮一  
 松村如洋  
 松村せつ子  
 宮川恵美子  
 毛利公子  
 渡邊 馨  
 若原和子

理事

大井政子  
 大工美智子  
 箕 ゆり子  
 河村美智子  
 喜多正恵  
 北川尚子  
 柴田晃良  
 濱口光良  
 山田綾子



# 組 織 分 担

『層宮』編集部

部長

松岡禮一  
上田善次  
木庭和子  
西島芳子  
廣田省吾  
山内梅乃  
梶野哲

広報部部长  
文化祭上演部

部長

山内梅乃  
北村孫衛  
鈴木幸子  
花田清美  
松村如洋  
宮川惠美子  
毛利公子

文化祭展示部

部長

上田善次  
赤坐右一  
打田照子  
岡田越子  
梶野哲  
廣田省吾

行 事 部 部 長

東 赤 坐 右 一 敬

組 織 部 部 長

松 岡 禮 一

配 布 部 員

神 功 地 区

第 1 団 地

北 川 尚 子

1 丁 目

河 村 美 智 子

1 丁 目 ガーデンハウス

藤 沢 陽 子

2 丁 目 土 橋 覺 二

3 丁 目 木 庭 和 子

4 丁 目 谷 口 三 枝 子

5 丁 目 酒 井 不 二 夫

6 丁 目 筧 ゆり 子

右 京 地 区

(山 内 梅 乃)

第 2 団 地

岩 崎 恭 子

3 丁 目

飯 田 雅 子

佐 々 木 純 子

山 内 梅 乃

下 司 まさ子

片 岡 圭 子

4 丁 目 岡 田 越 子

山 田 綾 子

菅 千 尋

5 丁 目

石 川 敏 子

右 京 団 地

西 村 美 佐 子

雀 雀 地 区

(玉 置 小 代)

1 丁 目

宮 崎 滋 子

井 本 市 子

2 丁 目

玉 置 小 代

3 丁 目

皆 藤 る み 子

4 丁 目

日 下 部 清 美

5 丁 目

奥 谷 敏 子

第 1 住 宅

鈴 木 和 子

第 2 住 宅

鈴 木 幸 子

6 丁 目

永 井 圭 子

左 京 地 区

(久 本 美 鈴)

1 丁 目

久 本 美 鈴

2 丁 目

喜 多 正 恵

3・4 丁 目

黒 田 節 子

駅 東 団 地

北 原 昭 子

## 編集後記

◆雨の少ない夏でした。夕立の少ない夏でした。会員の諸兄弟の皆様には、お健やかに<sup>お過</sup>ごしの御事と存じます。

◆連載の「すかたん近衛兵「嘆き節」も終わりに近づきました。いよいよ、来年は、歴史的記念日の「八月十五日」の記事になるのでしょうか？

キツと、貴重なお話を聞く事が出来る事でしょう。楽しみです。ネ。

◆西山佐代子さんは、七月十八日に御逝去されました。句稿の「蝦夷つづじ」は御遺稿となつてしまいました。誠に、残念です。謹んで、御冥福をお祈り申し上げます。

また、本誌に「書を楽しむ」と題して、寄稿して下さった田室西崖先生が、七月二十九日、御逝去されました。この原稿は、先生の御遺稿となつてしまいました。誠に、残念です。慎んで、ご冥福をお祈り申し上げます。(文はご逝去願)

◆第二十一号から「会員名簿」を割愛しましたが、皆様の御理解を得たようで、おしかりを受けておりません。有難い事と思っております。感謝しております。

◆昨年よりは、遅くなりました。本日、第二十二号をお届けいたします。「文責 松岡禮二」

編集委員

上田善次

木庭和子

西島芳子

廣田省吾

松岡禮一

山内梅乃